

目次

はじめに	兵庫県サッカー協会技術委員長 昌子 力
第一章	日本サッカーと兵庫県サッカーの背景（文責：昌子力）
資料 1	2009 年の約束（文責：昌子力）
資料 2	新技術委員会組織図（作：技術委員会）
資料 3	2007 年 技術委員会活動方針（文責：昌子力）
資料 4	FIFA クラブワールドカップ（文責：昌子力・福山友和）
資料 5	クラブ W 杯指導者研修会 2010 IN UAE 要綱
資料 6	参加者名簿
資料 7	研修における役割分担表
第二章	U.A.E 事情（報告：塩見元、大塚恭平、昌子力）
第三章	U.A.E サッカー事情 （報告・文責：岡俊彦、小畑明、昌子力、鈴木義章、河村優）
第四章	U.A.E クラブ視察（報告・文責：岡俊彦、小畑明、昌子力）
第五章	FIFA クラブワールドカップ視察・分析 （報告・文責：鈴木義章、吉田啓夫三、福山友和 小畑明、大塚恭平、井上信、岡俊彦、塩見元）
あとがき	兵庫県サッカー協会 高体連常任理事 本研修会リーダー 吉田啓夫三

はじめに

このたび社団法人兵庫県サッカー協会は公式事業として2010年12月13日（月）から20日（月）までの日程でアラブ首長国連邦（以下U.A.E）にて指導者研修会を実施した。兵庫県サッカー協会が主催する事業で指導者のみでグループを編成して海外にて研修会を実施（選手の海外遠征に帯同する指導者が同時並行で研修を行うのではなく）したのは初めて（高体連共催は1989年8月に一度開催）だと記憶している。この海外指導者研修会を開催するに至った経緯は後述するが、指導者のレベルアップのために海外研修は必要不可欠な事業だととらえ、実際に実現できたことは大変な喜びと同時に大きな責任を感じる場所である。



マルコ氏の講習会の様子



決戦を控えるザイードスタジアムの外観

《1》 海外指導者研修を企画した理由

海外指導者研修会を企画し実施に至るまでには当然のことながら兵庫県サッカー協会理事会内で考え方をすり合わせ、周到な準備が必要である。この事業の案件を技術委員会から理事会へ提案したとき、様々な考えのもと各理事から賛成意見に加え反対の意見も多数頂いた。その内容は『なぜ海外に出かける必要性があるのか?』『日本国内で指導者研修会を行ってはだめなのか?』『海外に行って研修をする前にやっておくことはないのか?』『なぜU.A.Eなのか?』といった意見であった。これらの意見は当然な話であり、技術委員会側としてもよく理解できるものだった。なぜなら各理事から出された意見は技術委員会としても何度も討議を重ねた内容だったからである。

技術委員会の結論は

- ① 2006年兵庫国体よりさらなる成果・結果を求めたい

→2009年の約束の実現（資料1）

それには指導者のレベルアップが必要不可欠であること

- ② 指導者の感性を変える必要があること
 - ③ グローバル化した時代かつ情報過多な時代にサッカー指導者がサッカーの本質を五感で感じずに真実を選手に伝えられるかという課題に立ち向かう必要があること
- といった理由であった。

そして出来ることなら海外指導者研修会としての目に見える成果を挙げ、“継続した事業”として次世代につなげて行きたいという思いもあった。

“2009年の約束”は後述する資料1に詳細を記載したが、これは2007年より発足した新技術委員会が2年間の時をかけて2009年4月に

『2009年の約束』“TEAM HYOGO”～ ちからをひとつに ～

というスローガンの下、5つの約束を宣言した言わば10カ年計画である。

約束は守らなければならないものである。我々技術委員会は自らに課題を課し、しかもそれを評価する側も評価しやすい形の表現（数字で表す成果）で目標を定めた。しかし問題はその約束の実現には指導力向上が絶対必要不可欠な条件であるということだ。

《2》 指導力向上のキーファクター

指導力向上と簡単に一言で言うが、競技レベルの高いタイトルマッチを戦い抜く指導を行うことや全国レベルの戦いを通して選手育成を行うということは言い換えれば

◇絶えず変化する自チーム選手・自チーム全体の様子を読み取る力

◇絶えず変化する相手チーム選手・相手チームの状態を読み取る力

◇試合が行われている環境・背景を読み取る力

◇ゲーム全体読み取る力

(試合の押し具合や押され具合(流れ)、攻守の流れや作戦遂行のための戦況把握)

◇自チーム選手・相手選手の能力の的確な分析(分析力)

◇分析の元、的確な戦術・戦略を練り上げる力(オーガナイズ力)

◇戦術・戦略を選手に伝える力(教授力)

といった能力が指導者には必要になってくるということである。と同時にそれらが特別なものではなく、ベースの力(基本の力として持ちあわせる)となっていく必要がある。そしてさらに対象年齢が成人未満であるなら指導のテクニックやスキル(教授法)以外に指導に関するフィロソフィーを指導者は持ち合わせる事が大切になり、実際のトレーニングのプラン作り、チーム・クラブ・選手を取り巻く環境等サッカーに関わるすべてのオーガナイズ力(言い換えればサッカーマネジメント力とでも言うのだろうか)をも持っていなければならないと言える。

ではそういった指導力を向上させ持ち合わせるためにはどうしたら良いのだろうか?そのためには多くの指導経験が必要になってくる。しかし多くの指導経験といっても幼稚園児から成人選手、男女選手、アマチュアからプロまでといったようにありとあらゆるカテゴリーを指導する経験を持ち合わせることはそう多くは無い。また異年齢を指導すれば良いというものでもなく専門のカテゴリーを深く追求することも必要なことである。しかしいずれにしても理解しなければならないことはその指導の現場において自分一人の感性・感覚・経験のみで長く指導を行うことによる周りが見えない状態に陥り指導力向上の妨げになっていないか振り返る必要があるということだ。そのため多く用いられる手法が『指導実践テスト』である。これはあるテーマに沿って実際に指導実践を積み重ね、然るべきインストラクターに的確な指摘とアドバイスを受け、自分のスキルアップを図る方法である。大切なのは他の目線からアドバイスを受けることであり、自分の偏った感性・感覚・経験・考え方のみで指導をせずに、“TPO に合った指導をする習慣”を身につけることである。しかし残念ながら自分一人であれこれ考えているだけではこういった能力は進歩しないものである。

とはいえ的確なアドバイスを受けられる環境にあったとしても・・・指導者自身に感性がなければ指導実践を繰り返してアドバイスを受けたとしても指導力は変化しない。

☆自身の失敗や成功の体験を整理し振り返りをしなければ

☆他者からのアドバイスを受け入れられる心の(懐の)大きさがなければ

☆それらを向上的な方向へ受け入れることが出来る“感性”を持っていないければ

☆違う角度でサッカーを観る視点の“豊富さ”・“柔軟性”を持ち合わせていないければ

＝凝り固まった指導感をもった指導者であったとしたら

指導実践を何回積み重ねても意味を成さない。指導のテクニックやスキルを語る前にその個人の感性が変わっていくことこそが大切であり、結局それが指導力を向上させ洗練させていく重要なファクターであると言えるのではないだろうか。

《3》 考え作りと環境作り

では、そう言った環境が少なく的確な指摘を加えてくれる高資質な指導者が少ないのであればどうしたら良いのか・・・答えは一つ。環境を作るしかない。

ではどうしたら良いのか・・・その答えが今回の海外指導者研修会であった。

“百聞は一見にしかず”である。サッカー文化が醸成している国の文化を紐解き、そういった国々の経験や質に教を請うことが方法となる。まだまだ教を請わなくてはならないレベルであるという背景が日本・兵庫にあるにもかかわらず、このグローバル化した時代・情報過多な時代にサッカー指導者がサッカーの本質を五感で感じずにいたらどうだろう？これから世界に旅立つかも知れない可能性を多く秘めた兵庫の選手達（子供達）に指導者が“自分の知っている範囲内だけのこと”・“今まで聞いた範囲内だけのこと”“自分の凝り固まった知識や経験の範囲だけのこと”で解釈したサッカーを教へ・伝えていたらどうだろう？世界のサッカー・競技力の高いサッカーを伝えられるのだろうか？

もちろん県下の指導者が全員そうなる必要があると言っているのではないし海外に行くことだけが良い指導者になる方法とは考えていない。しかし先人の知恵、サッカー大国の歴史、経験知、異文化に教を請うことは決してマイナスではないだろう。要はアンテナを張り様々な情報や知識を受け入れる準備が成されているか？そしてそれらを役立てる考え・気構えがあるかどうか？また自分磨きをしようとする考え・気構えがあるかということが肝要なのである。

それぞれ県下の指導者は個別に仕事を持ち生活環境も千差万別であるので研修会参加を断念した方もおられるだろう。研修会に参加するかしないか、参加したかしていないかが指導者の能力や質の良し悪しを決める条件ではない。機会のある者が参加し、タイミングの合った者が参加することでよい。そして人伝いに成果が広まって行き研修の輪が広まり機会を経験した指導者が増えていくことが大切である。そうやって感性が柔軟になった者が指導実践の必要性を感じ、自分磨きを重ねていくことこそが海外指導者研修会の根底に流れている狙いなのである。我々サッカー協会に携わる者はそういった気概のある者を育てること、そういった気持ちに答えるべき環境を提供することが使命であると考えている。

《4》 恐るべし U.A.E

もう一つの意見であった なぜ U.A.E だったのか？ 理由は 3 つ。

- ① 技術委員長の昌子力が U.A.E 副会長 Saeed A Hussain（ハッサン・サイード氏）と交流を深めているという縁から研修の受け入れ態勢を整えてもらえた点

* Saeed A Hussain (ハッサン・サイード氏) は 2011 年度より U.A.E F A 会長に就任。

- ② U.A.E で 2009 年、2010 年と 2 年続けて FIFA クラブワールドカップ (トヨタカップの名前が残っているのは、ホスト国の日本に対する宣伝面での配慮であり、現在は「FIFA クラブワールドカップ」に変更されている。) が開催されておりその準決勝 2 試合と 3 位決定戦・決勝戦の計 4 試合の視察をオーガナイズして頂けた点
- ③ U.A.E でのトヨタカップ視察の間、イタリアから S 級ライセンスを持つマルコ・フランチェスコ氏 (履歴後述) にゲーム分析セミナーの講師として招き入れることができた (人材を招聘できた) 点
- である。

また現在の U.A.E 事情を調べてみると U.A.E にて研修をするに値することがある。

ア) 2008 年 U-20 ワールドカップ世界大会ベスト 8 に進出

2008 年 U-20 ワールドカップにおいてアジア予選で敗れた日本とは対照的にアジア予選を突破し世界大会ベスト 8 に進出したのが U.A.E である。その背景にはイタリアサッカー協会と技術提携をしたことが好影響をもたらしている。

イ) プロチームの環境

ドバイにあるプロ 4 チームには下部組織がそれぞれ整備され各年代毎の専用グラウンドは勿論のことメディカル体制、選手育成への考え方などを比較すると日本の進歩以上に UAE も進歩しているように思われる。

ウ) UAE サッカー協会本部

今後はアジアといえば“日本”ではなく“UAE”といわざるを得ない位の発展を遂げている。我々日本にとって UAE が遠い国であって情報が入ってこないだけであり実際にはサッカーに力を注ぎ強化を図っている様は脅威とさえ言える。UAE はヨーロッパに近く、インテルミラノ、AC ミラン、アフリカ諸国の代表レベルのチームがキャンプに訪れるなど良い環境と思想を持っている。

サッカー協会は自社ビルを建設し、その中には立派なカンファレンスルーム、相手国の情報の分析ルーム、自国の選手のデータ管理のシステムを備えている。日本にもそういった施設がないとは言わないが強く日本を意識した設備の建設と投資にはその野望が見え隠れする。その UAE がトヨタカップを日本から持っていくのはやはりそれだけの財力と影響力を持っていると推測される。

馴染みが少なくある種未知の国とさえ言える U.A.E ではあるが U.A.E という国を謙虚に受け止めることも大切である。そしてハイレベルな試合をハイレベルな講師の元で学び自分の感性を磨く。外的環境においても異文化に触れ、如何に日本のサッカーが発展したのか、如何に日本のサッカーレベルが未発達なのかを客観的に見つめる、そのなかの兵庫というエリアで我々指導者は何をすべきか、何が足りないのか…。

自分磨きと同時に自分を振り返るためには今回は最大公約数的に U.A.E だったのである。

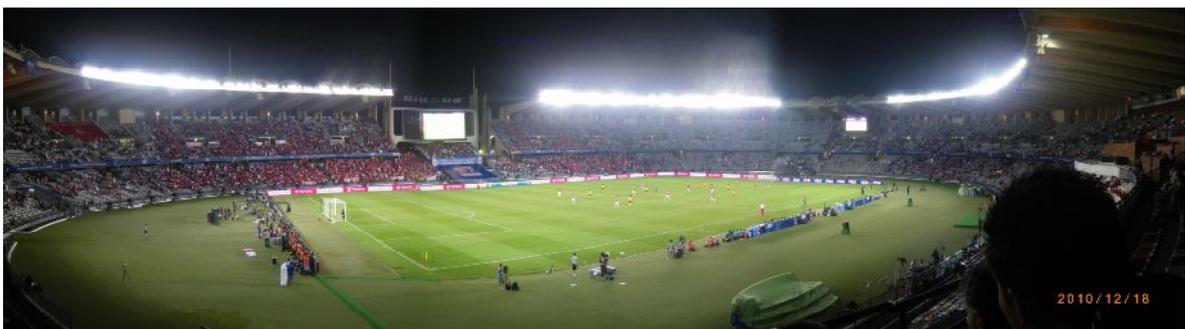
《5》 継続

狙い・意図は上記の事柄になるがこういった研修会を積み重ねていくことが最終的には指導者の質向上の一助となり、『2009年の約束の実現』、『サッカー王国兵庫の復興』の実現に向かっていくのだと考えている。机上の理論ではなく実際に動きさなければならぬ。そしてそれを繰り返さなければならぬ。選手に『プレーをやめるな！続ける！』と大きな声を出す指導者をたくさん見かける。実はそう言う指導者・役員・オトナ、兵庫の質を上げようとしている我々が、兵庫県サッカー協会に関わる役員こそがまず動きださなければならなかったのではないだろうか。

そういう意味で兵庫県サッカー協会理事会の決断と英断には敬意を表し、今回の機会を作って頂いたことに感謝し、必ずや成果を出さなければならぬと責任を強く感じている。そのため技術委員会は今後も高資質なサッカー研修の場をプレゼンテーションし、県内の多くの指導者に体験の場を提供することを使命としなければならない。この事業を継続定例化し今後も兵庫サッカー王国復興の礎にしたいと考えている。

なお、この報告書は参加者それぞれの研修における役割分担の下、担当箇所の報告書を編纂したものである。それぞれ参加者の感性・書式を極力変更せずそのままの文体を掲載した。また、試合の分析においては試合前に2～3人組を編成しAチームの攻撃と守備、Bチームの攻撃と守備というように4チームで分析作業を行った。試合はナイターで行われたため試合終了後、翌日の10:00から行うセミナーに合わせてグループごとに分析報告をまとめたのだが、その発表内容をデーターにしてこの報告書に掲載している。

文責 兵庫県サッカー協会 技術委員会委員長 昌子 力
姫路獨協大学スポーツ特別選抜運営支援室准教授
姫路獨協大学体育会サッカー部監督



FIFA CLUB WORLD-CUP 決勝が行われているザイードスタジアム

第一章

日本サッカーと兵庫県サッカーの背景

1980年代年後半、日本サッカー界ではプロサッカー設立準備委員会が設立されJリーグが1993年に開幕、サッカーブームが巻き起こっていた。この年、FIFA U-17世界選手権が日本で開催されたこととワールドカップまであと一步まで迫るいわゆる世に言う“ドーハの悲”劇が起こったのは偶然というには余りにも劇的な出来事であると言えよう。翌年のアメリカワールドカップ出場は逃したものの、その1994年にはU-19アジア選手権準優勝・1995年FIFA U-20世界選手権カタル大会ベスト8進出・同年U-16アジア初制覇・1996年FIFA U-17世界選手権エクアドル大会出場という若年層代表チームが世界に進出するという過去の日本サッカー界にはない大躍進を遂げた時代であった。その後も1998年フランスワールドカップ初出場、1999年FIFA U-20世界選手権(ワールドユース)で準優勝・2000年シドニーオリンピック決勝トーナメント進出・2002年日本・韓国共催ワールドカップ・ベスト16進出へと繋がっていったのである。同時に女子サッカー界もワールドカップへの3大会連続出場、ワールドユース女子サッカー選手権出場など成果をあげてきた。

その大きな要因は田嶋幸三氏、小野剛氏などを中心とした日本サッカー協会技術委員会指導者養成部が指導者のコーチングシステムを整理(1993年よりS級指導者養成講習会がスタートしA・B・C級コーチシステムの整備)したことが挙げられる。指導者養成講習会のカリキュラムの改編から始まって、思想と用語の統一など新たな試みが試されていったのである。そして1996年、初めて強化指針(以前に紙ベースで指針は出されたことはあるが製本された冊子として世に登場したのは初めてである。)が発刊され、全国各地の指導者の考え方や指導方法のベクトルが一定方向を向き始めた。そのサッカー界の変革の勢いをそのままに1998年に、遂に念願のFIFA WORLD CUP初出場を勝ち取ったのは無関係とはいえない。

こういった時勢の流れに乗じたかのように兵庫県では2006年に国体が開催されるということが1996年に決定され、地元開催の国体での3部門優勝・総合優勝・天皇皇后両杯の獲得を目標とし技術委員会が様々な策に着手したのである。2006年のじぎく兵庫国体では結局、成年男子4位・成年女子3位・少年男子3位と3部門優勝は成らなかったがサッカー競技総合優勝、サッカー競技天皇・皇后杯獲得という一定程度の目標達成は成し遂げた。しかしそれは同時に2007年以降、新たな時代に入ったことも意味した。兵庫県サッカー協会技術委員会では新たな目標作りとその実行のために2006年当時の委員長をはじめとする役員が勇退し、新たな役員人事・組織変革・目標作りが必要となったのである。

2007年、新技術委員会はそれまでの組織から少々簡素化し機能的かつ効率化を目指した。委員長には昌子力(しょうぢちから)が、副委員長には指導者養成部長中根成介(なかねしげよし)、強化部長鍵野剛一(かぎのたけかず)がそれぞれ就任。技術委員は各種別技術委員長

と専門委員長（13 都市協会技術委員長代表、ゴールキーパープロジェクト責任者、ユースダイレクター、キッズ技術部長、事務局長）から成り、計 13 名とした。簡素化はしたものの前技術委員会と違う点は強化部・指導者養成部・インストラクター部・13 都市協会技術委員長会を並列し各グループでの会議を定例化、そこに携わる多くの人たちの意見や考えが反映される組織作りを実現した。（資料 2 参照）

2007 年 4 月 11 日には最初の方針を提出し正式に新技術委員会は発足したのである。（資料 3 参照）



FIFA CLUB WORLD-CUP 2011 ロゴ



日本サッカー協会 田嶋幸三氏



毎年 1 月第 4 土曜日に行われている兵庫フットボールカンファレンスの様子

(資料 1)

2009 年の約束 “TEAM HYOGO”～ ちからをひとつに ～

* 2007 年から 2008 年末にかけて技術委員会・13FA 技術委員長会議・県トレセン全スタッフ・指導者養成部すべてのメンバーで討議し作成したものであり、県サッカー協会理事会にて提案・承認された技術委員会の目標である。ただこれらの遂行にあたっては各種別技術委員会、13FA 技術委員会(各都市種別技術委員会)、専門員会がイニシアティブを取り進めていくこととなっている。

①日本サッカー協会と兵庫県サッカー協会連携

ちからをひとつに⇒代表選手の輩出

短・中期目標

- ☐ 2009 : W-17/20 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 2 名輩出
- ☐ 2010 : W-CUP A 代表 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 2 名輩出
- ☐ 2011 : W-17/20 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 2 名輩出
- ☐ 2012 : オリンピック 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 2 名輩出
- ☐ 2013 : W-17/20 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 2 名輩出
- ☐ 2014 : W-CUP A 代表 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 2 名輩出

長期目標

- ☐ 2015 : W-17/20 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 3 名輩出
- ☐ 2016 : オリンピック 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 3 名輩出
- ☐ 2017 : W-17/20 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 3 名輩出
- ☐ 2018 : W-CUP A 代表 兵庫県出身(兵庫県トレセン経験者)選手 3 名輩出

②指導者養成事業強化

ちからをひとつに⇒指導者養成事業(A/B 級トライアル)

- ☐ A 級コーチ講習会

…関西トライアル(テスト)にて 2～3 名を輩出(兵庫・大阪・京都から 3 名ずつ、奈良・和歌山・滋賀から 2 名ずつの計 15 名中 6 名のみが本講習会の受講資格を与えられる。)

⇒兵庫県から必ずしも受講者が輩出されるわけではないので A 級保持者が増えなくなる可能性がある。

2009 年: 2 名、2010 年: 3 名合格。

- ☐ B 級コーチの質アップ

⇒指導実践を重ねていく兵庫独自のコーチングコースの開設

- ☐ C 級コーチの質アップ

リフレッシュ研修会の充実→分科会形式 兵庫フットボールカンファレンスの開催

トレセンスタッフの強化＝日々のトレセン強化

③グラスルーツの強化

ちからをひとつに⇒キッズ委員会とのコラボ

- ▣ キッズプロジェクト→キッズ委員会への昇格
- ▣ キッズ委員会のイベントに参画
- ▣ キッズ年代と4種トレセンのコラボを実践
→キッズリーダー養成、キッズエリート

④女子の強化

ちからをひとつに⇒女子トレセン・国体強化

- ▣ TASAkiの休部に伴う国体女子の部の強化策
⇒それゆえに女子トレセンのさらなる充実が急務
女子強化指定チームの選定

⑤13FA技術委員長会議の重要視

ちからをひとつに⇒兵庫全体の網羅・ベクトル

兵庫全体の情報共有・問題共有

- ⇒兵庫の活性化＝都市協会の活力あってこそ
- ⇒13FAの技術委員長によるネットワーク強化…兵庫の強化

指導者養成・トレセンの協力化

- ⇒トレセンマッチデーの実施
- ⇒毎月第4日曜日(関西FAと並行して)

選手育成・環境充実

- ⇒都市協会内の1種～女子のトレセン活動充実
…システムの構築が必須

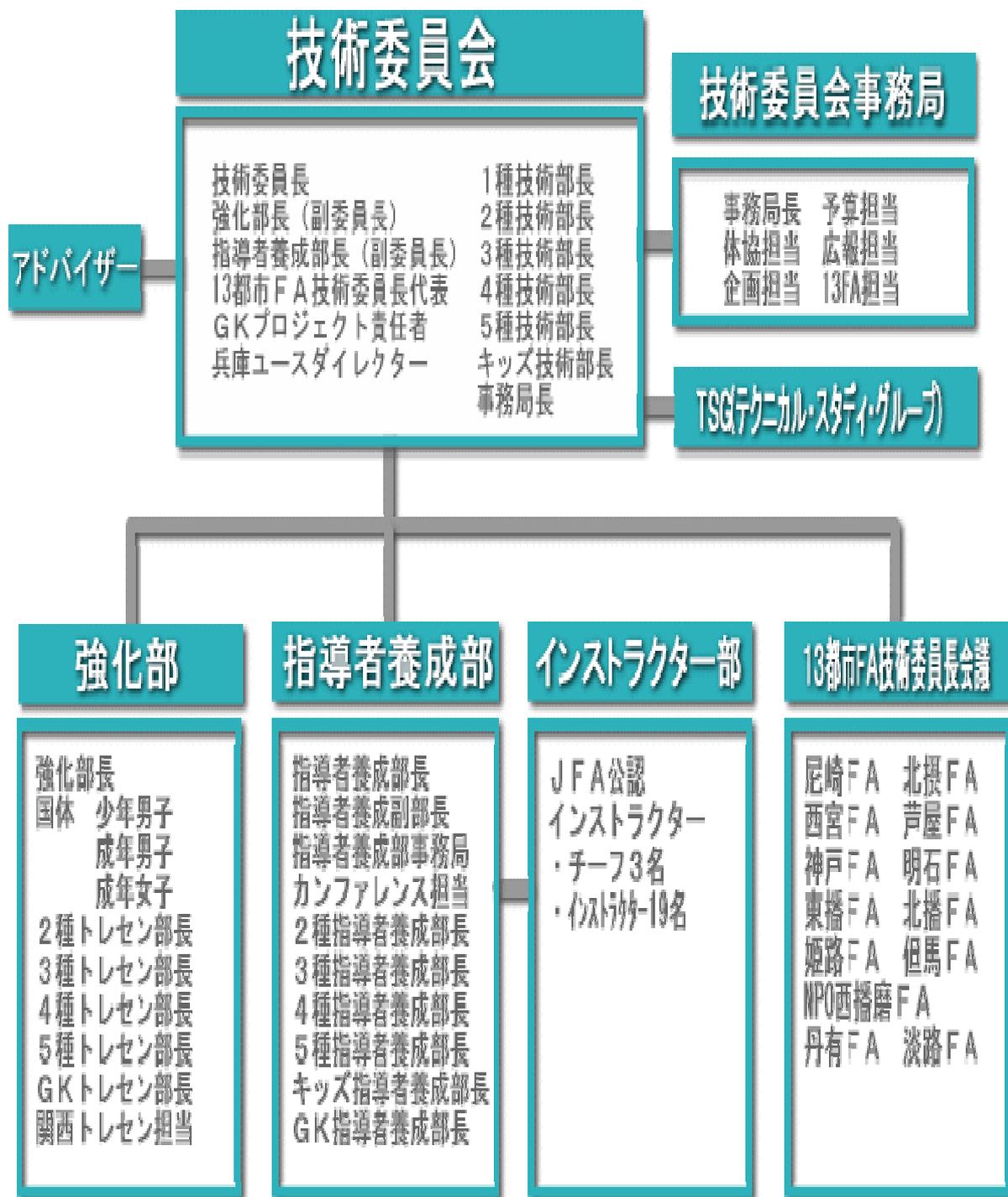


兵庫県サッカー協会の指導者養成の取り組み。

(左は2008年に行った元ブラジル代表オスカー氏による講習会。右は2011年3月に行ったスペインFA公認コーチ アルベルト氏による講習会。)

(資料2)

新技術委員会組織図



～ はじめに ～

日本サッカー『世界のトップ 10』を目指して

1993年にJリーグがスタートして以来、日本サッカー界は、1998年フランスワールドカップ出場、1999年ワールドユースで準優勝、2000年シドニーオリンピック決勝トーナメント進出、2002年日本・韓国共催ワールドカップ・ベスト16進出など世界の檜舞台でめまぐるしい活躍を見せてきた。同時に女子サッカー界もワールドカップへの3大会連続出場、ワールドユース女子サッカー選手権出場など成果をあげてきている。これは、日本サッカー協会技術委員会が1996年以来、指導者養成事業・強化事業を統一した考え方で進めてきた成果といえる。

つまり世界のサッカーをスタンダードととらえ、各年代のW杯において抽出された課題を克服するシナリオを作成、そしてそれらをU-16・U-14・U-12のナショナル・トレーニングセンターにおいて全国のユース世代選手や指導者に発信、また各種指導者講習会・研修会においても問題意識を高め、克服に向け徹底・伝達してきた結果である。

その後も日本サッカー協会留まることなく次々と新しい施策を展開している。『世界のトップ 10 入』を目標に掲げ、その実現に向けトレセン制度の改革・指導者養成事業改革・エリートプログラム創設・JFAアカデミー設立などを行ってきた。また一方で強化ばかりでなく、普及をも視野に入れたキッズプロジェクトなどの施策の展開も忘れてはならない。

兵庫県FA『2006 兵庫国体』を終え、新たな時代のスタート

2006年に兵庫県で国民体育大会が開催された。県技術委員会は1996年に地元兵庫国体に向け10ヶ年計画を策定・実行した。その成果とも言えるのが史上初の開催県サッカー競技総合優勝である。成年男子4位、成年女子3位、少年男子3位という順位は近年に無い結果であるが同時に兵庫国体少年選抜チームから17才以下世界選手権日本代表に選手を輩出することができたこと、この2～3年の間で兵庫出身のナショナルチーム選出経験者が10人以上をかぞえる(加地、播戸、横谷、柏木、柳川、河本、木下、森島、香川、堂柿、佐川、米本、高島、中谷、小林等)ということがもう一つの成果と言えるのではないだろうか。もっともこの結果は県協会だけの努力ではなく各選手が所属する単独チームでの日々の活動によるものが大きいといえるが単独チームとトレセンの協力なくして成し得ることのない成果であると自負している。ただ県協会もここで満足することなく常勝兵庫・優秀選手排出王国兵庫に成り得ようますます充実した施策を考えていかなければならない。

また女子の部では、田崎ペルーレ、INACのLリーグでの活躍を始め、単独チームの強化と協会女子技術部の組織化などが効果を挙げ、女子サッカー発祥・王国兵庫に近づきつつあると考えている。

これらの成果を継続し更なる飛躍を達成するためにも加盟登録クラブにおかれては本委員会の主旨をご

理解いただき県下全域で小学生から高校生まで一貫して行われるトレーニングセンター(都市協会選抜⇒県選抜⇒関西代表⇒日本代表)活動への選手・指導者の派遣を始め、その主旨の徹底にさらなるご協力を頂けたら幸いである。また、指導者養成事業にも積極的に参加いただき、各クラブのレベルアップにご活用いただけたら技術委員会としては本望である。

また、県下唯一のJクラブ『ヴィッセル神戸』にもこの主旨にご賛同いただき、選手・指導者の育成や施設の提供など、多方面でご協力を得、この活動が大きな成果を上げる事が出来ることを願ってやまない。

2007年活動方針

☆HFA 技術委員会委員長交代 松永正利氏⇒昌子力氏

2004年度より発足、2006年以降の県技術委員会を活性化させるための改革プロジェクトの長を歴任し地元国体以降の兵庫のサッカーの施策のプランニング担当および委員会の統括

1) 県技術委員会と 13 都市協会技術委員会とのコミュニケーションの充実と都市協会技術委員会活動の活性化 担当:企画部・トレセン統括部・指導者養成部

・都市協会推薦のB級コーチ養成

(2000 北播・淡路)(2001 芦屋・但馬・姫路)(2002 龍野・丹有)(2003 西宮・尼崎・神戸)
(2004 明石・東播・北播)5年間で 12 地域達成

・JFA公認C級コーチ養成事業の受講生の推薦

・トレセン活動への補助金とU-11 からU-17 まで年間継続した活動のお願い

・都市協会での少年・少女指導者講習会(リフレッシュ含む)の開催

2) 日常トレセン活動の充実

担当:トレセン統括部

・県トレセン活動の充実…「Be alert!」の徹底。指導現場の充実(専任コーチ検討)。

・都市協会トレセン活動の充実:トレセン活動の年間計画の実施/現状調査。

3) 8~18歳までの発育発達を考慮した一貫指導プログラムの再検討。

担当:トレセン統括部

・兵庫県独自の一貫指導プログラムの再検討。特色ある選手育成へ。

・各カテゴリー別選手選考基準の見直し

・U-11~U-18トレセンスタッフのコミュニケーションの充実

4) 広報活動と連係して本委員会の考え方を県下に広める。

・公認インストラクターの活用…「少年少女指導者講習会/リフレッシュ研修会の開催」

[担当インストラクター主任名]04年度は担当が変わる場合もあります

尼崎:阿部、西宮:瀬川、芦屋:加藤、北摂:山田、神戸:天野、明石:前田、東播:水野

北播:藤本、姫路:昌子、龍野:岡、丹有:八木、但馬:加藤、淡路:志賀

*主任インストラクターが都市協会担当者と同相談の上、開催日程を決めてください。

・兵庫県FA(年間技術レポート・強化計画等)広報部への情報の提供

5) 指導者養成事業の充実

担当：指導者養成部

・JFA 公認B級コーチ・コースの兵庫県開催

前期：7月9日～14日・淡路五色町 後期：12月8日～13日・淡路五色町

①県選抜チーム・スタッフ：松岡徹氏(2種)横田滋氏(2種)河月優輝氏(女子)平井秀尚(1種)

②都市協会推薦枠：姫野貴之氏(明石FA・クラブ連盟)三谷英司氏(東播FA)

本城幸治(北播FA)

③その他の枠：赤尾修(自己推薦)氏 以上8名

・JFA公認C級コーチ養成講習会の開催 各50名募集

夏季集中コース：8月4～7日+12月18日(3泊5日)／しあわせの村

冬季土日コース：12月4・5・11・12・18日／しあわせの村ほか

・リフレッシュ研修会の充実 各年代別に開催

1種～4種：1月22日(土)しあわせの村

2種：2/19～20 県民大会

3種：8/2～3 U-15 選抜大会

4種：2/12～13 県都市対抗

女子：2/26～27 ウーマンズカレッジ

日程変更の可能性あり

・JFA公認D級コーチ(旧少年少女指導員)養成講習会の開催

13都市協会で開催／リフレッシュ研修会も

・都市協会トレセン・スタッフの県中央研修会の開催(各カテゴリー別)

U-12(小学生)7月県少年技術講習会、2月県少年都市対抗

U-15(中学生)8月1・2日(3年生選抜大会)

U-18(高校生)2月県民大会

・NTCへのスタッフの派遣(各カテゴリーへ2名／補助金あり)

U-12:2004/1月上旬 淡路五色

U-14:03月下旬 Jヴィレッジ

U-16:11月下旬 Jヴィレッジ 女子:未定

6) 海外キャンプの実施 担当：2006国体委員会

・U-14/U-17の海外キャンプを実施

7) GKプロジェクトの充実 担当：GKプロジェクト

・HFA・GKインストラクター研修の実施(毎年2月)

・13FAにGKコーチの育成

・少年少女指導者講習会でのGKプログラム(講義と実技)の実施

8) 女子技術委員会の組織の充実 担当：女子部

・U-12～U-18各カテゴリー別スタッフの養成

・13都市協会への女子技術委員会の組織化と予算化

(資料 4)

FIFA クラブワールドカップ

FIFA クラブワールドカップ(フィファクラブワールドカップ、英: FIFA Club World Cup)は、国際サッカー連盟(FIFA)が主催する、クラブチームによるサッカーの世界選手権である。2000年に第1回が開催されたが、その後中断。2005年からインターコンチネンタルカップ(トヨタカップ)を吸収し、6大陸の選手権王者がトーナメント方式で優勝を争う形となった。2005年までの大会名称は「FIFA クラブ世界選手権」(英: FIFA Club World Championship)であったが、2006年より「FIFA コンフェデレーションズカップ」を除くFIFA主催の国際大会を「ワールドカップ」で統一する方針により現在の名称に改められた。

この大会は世界6大陸で行われている各大陸別サッカー選手権である、アジアサッカー連盟(AFC)主催のAFCチャンピオンズリーグ、アフリカサッカー連盟(CAF)主催のCAFチャンピオンズリーグ、北中米カリブ海サッカー連盟(CONCACAF)主催のCONCACAFチャンピオンズリーグ、南米サッカー連盟(CONMEBOL)主催のコパ・リベルタドーレス、オセアニアサッカー連盟(OFC)主催のOFCチャンピオンズリーグ、欧州サッカー連盟(UEFA)主催のUEFAチャンピオンズリーグの各大陸王者チームと開催国の国内リーグ優勝チームが一堂に会して「クラブチームの世界王者」を争う大会である。ちなみに、この大会の第1回大会は公式記録上、2000年にサンパウロとリオデジャネイロで開催された「FIFA クラブ世界選手権」(ブラジル大会)である。なお、このフォーマットが整備されたのはトヨタカップを吸収した2005年以降の事である。又2007年からは開催国の国内リーグ優勝クラブ(開催国の国内リーグ所属チームが所属連盟の大会で優勝した場合は所属連盟大会準優勝チームが出場。同一国から2チーム以上は出場できない)が加わるようになった。大会名としては「クラブチームによるFIFAワールドカップ」だが、国別対抗戦ではなく大陸王者による対抗戦なので、性格としてはむしろ「クラブチームによるFIFAコンフェデレーションズカップ」に近いといえる。

前史

サッカーのクラブ世界一を決める大会は1960年代からインターコンチネンタルカップが行われていた。同大会では欧州(UEFAチャンピオンズリーグ)と南米(コパ・リベルタドーレス)の王者同士の直接対決によって「事実上」の世界一が決められていた。その為、欧州と南米が世界のサッカーの2大中心地であった時代まではこれ以上の大会は必要なかった。

しかし、20世紀末頃からFIFAワールドカップなどで欧州や南米以外の大陸の国々の躍進も目立ち始めた。この為、当時のFIFA会長であったゼップ・ブラッターが「クラブの世界一決定戦においてもワールドカップと同じように全大陸連盟から代表を集めて、真の意味での『クラブチームの世界王者』を決めよう」と提唱した。こういった背景もあって、FIFAが創設したのがこの大会の前身にあたる「FIFA クラブ世界選手権」である。

2000年大会～2001年大会

こうして2000年1月初旬にブラジルのサンパウロとリオデジャネイロで、「FIFA クラブ世界選手権 2000」

(第 1 回大会)が開催された。なお、決勝戦は南米対欧州の構図にはならず、地元ブラジルの「コリンチャンス 対 ヴァスコ・ダ・ガマ」となり、優勝したのはコリンチャンスであった。コリンチャンスは、大陸連盟のクラブ選手権を勝ちあがったチームではなく、ブラジル全国リーグ「ブラジル全国選手権」の優勝クラブであることによる開催国枠で参加していたため、大会の性格との不整合から一定の疑問が付随することになった。翌 2001 年の第 2 回大会は、スペインのマドリードで、出場チームを 12 まで増やして、第 1 回大会よりも大規模な大会として開催されるはずであった。しかし、大会の運営を任されていた代理店の ISL^{注1}社の倒産が影響し大会スポンサーが集まらず、第 2 回大会は開催中止となった。その後、何度も再開のための検討が続けられたが、2005 年までは同大会を開催することが出来なかった。

注 1(国際スポーツマーケティング企業「International Sports and Leisure」の略称。1982 年にアディダスのホルスト・ダスラーが電通と共同で設立したマーケティング代理会社。FIFA ワールドカップやオリンピックなどの世界的なスポーツマーケティング利権を一手に握り、放映権の管理などをしてきた。しかし、IOC との関係解消や多角経営が裏目に出て経営悪化、2002 FIFA ワールドカップと 2006 FIFA ワールドカップの放映権ビジネス不調が決定打となり、2001 年に約 495 億円の負債を抱えて経営破綻した。)

2005 年大会以降

こうして再開に向けて模索を続けた FIFA クラブ世界選手権だが、その道のりは平坦ではなかった。その理由としては、大会スポンサーが思うように集まらないことと、ビッグクラブを中心とした欧州連盟の反対がある。特に後者の要素は大きく、所属選手がクラブチームと母国代表チームの試合によるハードな移動と過密日程を毎年こなさなければならず、その影響が相次ぐケガや疲労による試合でのパフォーマンス低下という事態を招いていた。また、既に欧州王者と南米王者が対戦するトヨタカップが存在していたために、新たな FIFA の大会創設には消極的にならざるを得なかった。

しかし、交渉の結果、2005 年にトヨタカップを吸収し、同大会のフォーマットを受け継いだ上で再開を果たすこととなった。これによって、6 大陸連盟のクラブ選手権の優勝クラブが出場権を獲得する現行のフォーマットが成立した。この時のクラブ世界選手権は、トヨタカップの継承大会という性格を強く持っていた。そのため、日本で開催すること、冠スポンサーであるトヨタ自動車の名を採ったトヨタカップの名称を継承することとなった。また、ホスト・ブロードキャスターもトヨタカップから日本テレビを継承して、ホスト国である日本に対して配慮した。

大会名は、2005 年大会が「FIFA Club World Championship TOYOTA Cup Japan 2005」であった。トヨタカップの名前が残っているのは、ホスト国の日本に対する宣伝面での配慮である。2006 年大会から、FIFA のマーケティングの関係上「FIFA クラブ世界選手権」から「FIFA クラブワールドカップ」に変更された。対外的な呼称も「FIFA Club World Cup presented by TOYOTA」となった。日本語では、「TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ」が正式名称であり、ホスト・ブロードキャスターである日テレではこの正式名称を用い、宣伝等で「クラブのワールドカップ」という呼び方を使用しているが、一般的には「クラブワールドカップ」や「クラブ W 杯」という呼び方・表記をしている。なお FIFA のメディアガイドラインでは「ワールドカップ」の名称を「W 杯」と表記することを認めていない。

2007 年以降の大会からは開催国枠が設置され、開催国の国内リーグ優勝クラブに本大会出場権が

与えられることとなった。ただし、開催国の国内リーグ優勝クラブと開催国が所属する大陸連盟のクラブ選手権優勝クラブが同一国のクラブだった場合は、同一国から 2 チームが出場しないように配慮するため、大陸連盟のクラブ選手権で開催国以外の最上位クラブ(原則準優勝クラブ)に対して出場権が与えられることになった。また、2007 年のみ 5 位決定戦は行わなかった。FIFA は 2008 年 5 月 27 日にオーストラリアのシドニーで理事会を開き、2009 年・2010 年の開催地をアラブ首長国連邦、同時に 2011 年・2012 年の開催地を日本に決定した。

2010 年度大会、出場チーム

アジア王者 (AFC)	城南 (韓国)
アフリカ王者 (CAF)	マゼンベ (コンゴ民主共和国)
北中米カリブ王者 (CONCACAF)	パチューカ (メキシコ)
南米王者 (CONMEBOL)	インテルナシオナル (ブラジル)
オセアニア王者 (OFC)	ヘカリ・ユナイテッド (パプアニューギニア)
ヨーロッパ王者 (UEFA)	インテル (イタリア)
開催国王者 (UFL)	アルワハダ (UAE)



(資料 5)

クラブ W 杯指導者研修会 2010 IN UAE 要綱

- 主 旨** 兵庫県サッカー協会では兵庫国体以降の目標として『2009 の約束』を掲げた。この目標を達成するために兵庫県に所属する指導者に“兵庫に生まれ育つ個を今まで以上に高いレベルへと育成し、ひいてはチームの強化・日本を代表する個の育成”をより一層意識し日々の指導の現場に立ってほしいと願っている。まさに指導者の強化を図らなければならない時期と考えている。
- そこでこのたびイタリアサッカー協会とアラブ首長国連邦(以下 UAE)協会の協力を受け、クラブ W 杯の視察や UAE サッカー協会との交流(UAE プロクラブ視察)を行うことにより国際的な指導者に成長する一助とし、強化育成を実践できる指導者養成を目指す。
- 名 称** クラブ W 杯指導者研修 2010 IN UAE
- 開催日** 2010 年 12 月 13 日 (月) から 2010 年 12 月 20 日 (月) 7 泊 8 日(機中 1 泊)
- 訪問地** アラブ首長国連邦
- 主 催** 兵庫県サッカー協会
- 後 援** 兵庫県体育協会
- 協 賛** (株)ウィンスポーツ、NPO 法人 Cento Cuore
- 協 力** UAE サッカー協会
- 日 程** 別紙日程表による
- 視 察** UAE プロクラブ (アルアハリ) トレーニング内容・施設視察
- 視 察** 2010 年 12 月 18 日クラブ W 杯 3 位決定戦・決勝
- 2010 年 12 月 15 日クラブ W 杯準決勝 2 試合
- UAE プロリーグ「アルワハダ対バニヤス」 計 5 試合視察
- 費 用** 研修会費用 22 万円以内 (税込み)
- 目 的** 1 トップレベルの試合観戦
- 2 UAE サッカー事情視察
- 3 国際的な指導者の育成
- 内 容** 1 トップレベルの試合観戦
- 2 UAE サッカー事情視察
- 3 国際的な指導者の育成
- セミナー講師**
- マルコ・フランチェスコ
- イタリアサッカー協会公認 S 級コーチ
- セリエ A 400 試合出場
- アルゼンチン代表ヴェローンとサンプドリアで共にプレー

カペッロ(現イングランド代表監督)、プランデッリ(現イタリア代表監督)マンチーニ(現マンチェスターシティ監督)、ボスコフ(元サンプドリア監督)、エリクソン(元イングランド・スウェーデン・コートジボアール代表監督)等の指導を受ける。

シモーネ・ビアンコーニ

通訳兼研修会コーディネーター



講師のマルコ・フランチェスコ氏と通訳の河村氏



講義中のマルコ・フランチェスコ氏

(資料7)

研修における役割分担表

HFAクラブ W カップ指導者研修 2010 IN UAE

記録・報告役割分担

1	報告	責任者	補助	
①	JFA	昌子	鈴木	岡
②	HFA事務局	昌子	鈴木	岡

2	発表	責任者	補助	
①	HFAフットボールカンファレンス(プレゼンテーション)	大塚	河村	鈴木
②	各種研修会	鈴木	岡	松田

3	記録	担当	責任者
①	ゲーム分析(テクニカル)	全員	井上
②	チーム分析(テクニカル)	全員	松田
③	大会分析(社会学的見地)	山崎	
④	UAEクラブ事情(全般)	小畑	
⑤	UAEクラブ事情(育成)	岡	
⑥	海外指導者研修(内容・今後の課題など)	吉田	
⑦	UAE事情(交流・兵庫の受け入れ準備など)	塩見	
⑧	UAE事情(経済・食事・宿泊施設など)	大塚	

- ※ 担当者は記録(画像・メモ)を記録し、整理する
- ※ 記録は報告責任者(昌子・鈴木)に速やかに報告する
- ※ 自身の担当だけでなく、記録のし損ない・データの紛失に備えて出来る限りの記録を取るよう心がける

第二章

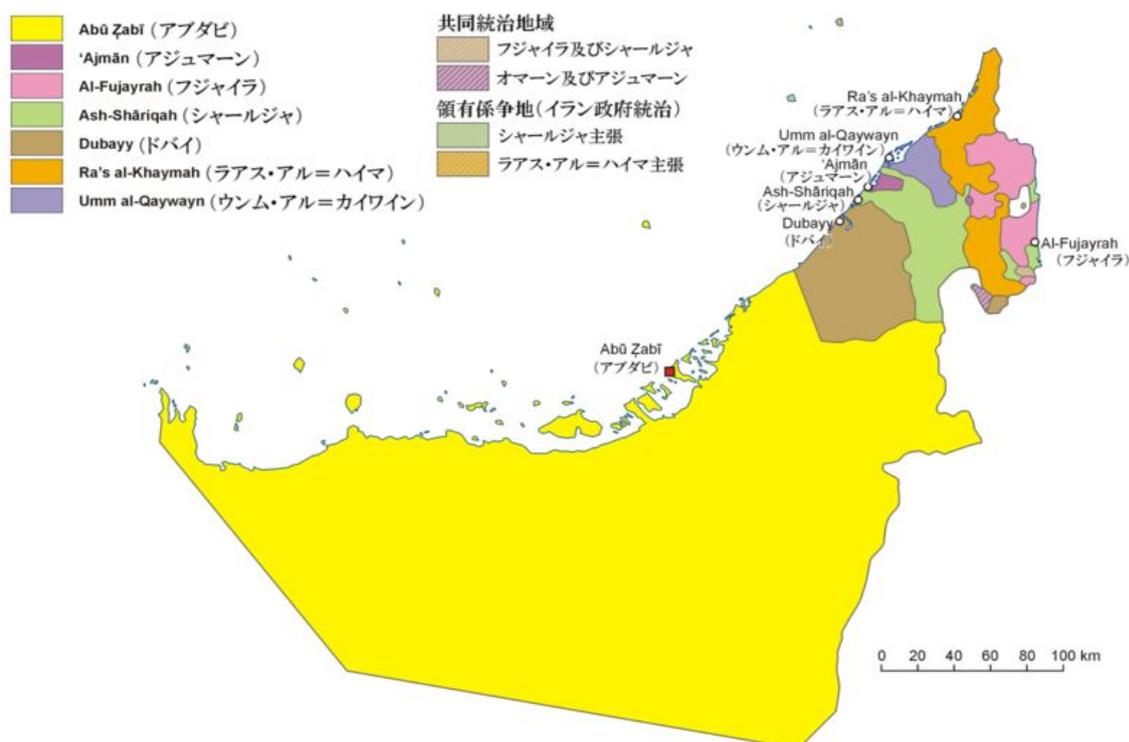
U.A.E 事情(報告：塩見元、大塚恭平)

正式名称はアラビア語で、المتحدة العربية الإمارات (ラテン文字転写：Al-Iḥarāt al- Arabīyaal-Muttahida; アル=イマーラート・アル=アラビーヤ・アル=ムッタヒダ)。略称は إمارات (イマーラート)で、これはアラビア語で「首長国」を意味する、「イマーラ」という単語の複数形である。公式の英語表記は、United Arab Emirates。略称は、UAE。日本語の表記は、**アラブ首長国連邦**。日本語名称を**アラブ首長国連合**としている場合が見受けられるが、外務省では**アラブ首長国連邦**としている。また、サッカーなどスポーツ競技内では英字略である UAE を使用することが多い。

◇アラブ首長国連邦を構成する7つの首長国

- ・アブダビ首長国
- ・ドバイ首長国
- ・シャールジャ首長国
- ・アジュマーン首長国
- ・ウンム・アル=カイワイン首長国
- ・フジャイラ首長国
- ・ラアス・アル=ハイマ首長国

* アブダビ首長国、ドバイ首長国が2大首長国



◇ アラビア半島の南東部にあり、ペルシア湾とオマーン湾に面している。国土の大部分は、平坦な砂漠地帯であり、一部に砂丘も見られる。東部に僅かに山岳地帯がある。ホルムズ海峡(海峡に臨むムサンダム半島はオマーン領)に近いということで、地政学上、原油輸送の戦略的立地にある。国民のほとんどは沿海地方に住む。また 7 首長国のうち、フジャイラを除く 6 国は西海岸(ペルシア湾岸)に、フジャイラは東海岸(オマーン湾側)に位置する。砂漠気候(BW)のため、年間通じて雨はほとんど降らないが、冬季に時折雷を伴って激しく降る事がある。ペルシア湾に面し海岸線が長いことから気温の日較差は小さい。11~3 月は冬季で、平均気温も 20 度前後と大変過ごしやすく、観光シーズンとなっている。6~9 月の夏季には気温が 50 度近くまで上昇し、雨が降らないにもかかわらず、海岸に近いので湿度が 80%前後と非常に高くなる。ドバイの平均気温は 23.4℃(1 月)、42.3℃(7 月)で、年降水量は 60mm。

*国土面積は北海道とほぼ同じ

◇ 住民は、在来のアラブ人からなるアラブ首長国連邦の国民は全体の 19%を占めるに過ぎない。その他は外国籍の住民であり、他のアラブ諸国から来た人々や、イラン人、南アジア系 50%(インド人 140 万人、パキスタン人、バングラデシュ人、スリランカ人)、東南アジア系(フィリピン人)、欧米系、東アジア系の人々などがある。これらの外国籍の多くは、石油収入によって豊かなアラブ首長国連邦に出稼ぎとしてやってきた人々である。しかし、単身が条件で家族を連れての居住は認められていない。長期在住者でも国籍取得は大変難しく、失業者は強制送還するなど、外国人へは厳格な管理体制がなされている。

◇ 言語はアラビア語が公用語である。ただし、外国人が多いため、英語や南アジア系の言葉なども広く使われている。

人口の推移	1975 年	1980 年	1985 年	1990 年	2008 年
アブダビ	212,000	454,000	670,000	889,000	896,751
ドバイ	183,000	276,000	419,000	559,000	1,770,533
シャールジャ	79,000	159,000	269,000	377,000	845,617
ラアス・アル＝ハイマ	44,000	75,000	116,000	159,000	171,903
アジュマーン	17,000	36,000	64,000	92,000	372,923
フジャイラ	16,000	32,000	54,000	76,000	107,940
ウンム・アル＝カイワイン	7,000	13,000	29,000	46,000	69,936
合計	558,000	1,045,000	1,621,000	2,198,000	4,599,000

*人口は兵庫県より少ない(約 4 5 0 万人)

◇ 2010年のGDPは約2396億ドル(約20兆円)であり、埼玉県とほぼ同じ経済規模である。GDPの約40%が石油と天然ガスで占められ、日本がその最大の輸出先である。原油確認埋蔵量は世界5位の約980億バレル。天然ガスの確認埋蔵量は6兆600億m³で、世界の3.5%を占める。一人当たりの国民所得は世界のトップクラスである。アルミや繊維の輸出も好調である。なお近年は、産業の多角化を進め、石油などの天然資源の掘削に対する経済依存度を低め、東南アジアにおける香港やシンガポールのような中東における金融と流通、観光の一大拠点となることを目標にしている。1981年にドバイに設立されたジュベル・アリ・フリーゾーンには、外国企業への優遇制度があり、近年、進出が急増して、物流拠点となっている。また、近年は観光客を呼び寄せるためのリゾート施設の開発に力を入れており、世界一高いホテルであるブルジュ・アル・アラブの建設や、「パーム・アイランド」と呼ばれる人工島群など、近年急速に開発が進んでおり、中東からだけでなく世界中から観光客を引き寄せることに成功している。

*各王族が政治・経済をコントロール

*外国企業に優遇政策が成功

*外国人の管理は厳しいが、8割は外国人 (単身が原則で国籍はとりにくい)

トピックス

◇ドバイはリーマンショック後も発展を続けている

◇高速道路が完備しているが、市街地は混雑

◇外国人が多く、イスラム教徒一色ではない

◇治安は安全

◇食事はラム肉と香辛料は多彩(濃い)

◇両替レートはアブダビよりもドバイが良い

◇日用品の物価は安い

(例)ミネラルウォーター25円

マクドナルドのハンバーガー100円



ドバイタワー



バイ市街

第三章

U.A E のサッカー事情 （報告・文責：岡俊彦、小畑明）

UAE 協会本部の訪問とアルアハリクラブ、バニヤスクラブの視察の中から感じるものを書き出してみた。

①UAE 協会にて

- ・ UAE 協会に所属する選手は協会内の施設において登録用の写真を撮影する。
（全国から協会に来て写真を撮る。協会に撮影に必要な機器が完備。）
- ・ 協会の敷地の中に（隣の敷地に）いわゆる J ビレッジの様な施設を建設中
（天然芝 2 面、クラブハウス、宿泊施設、一部は 2011 年 5 月にも完成予定）
- ・ 会議室は FIFA 理事会ができるようになっており、同時通訳のブースもある。
- ・ 座席はパーソナルモニター、シートはフェラーリの革張りである。
- ・ 会議室自体がスタジオになっており映像をライブで中継、配信できる。
- ・ 審判部ルームは最新の VTR 機器とモニターが並んでおり(4～5 台)、最新の試合の分析をしてレフリーの技術向上に努めている。



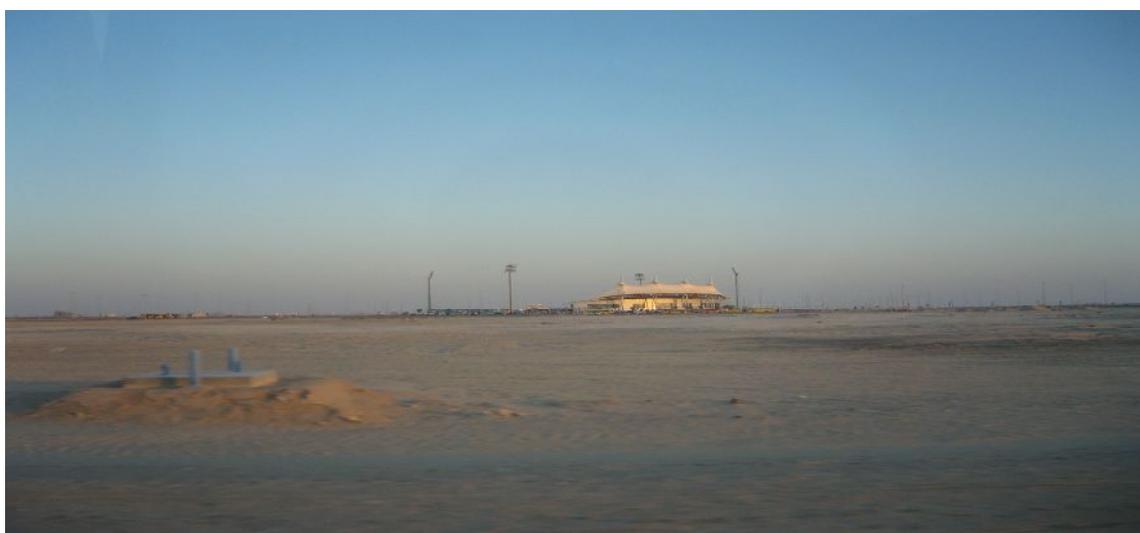
UAE FA 内カンファレンスルーム



UAE FA 内会議室

②バニヤスのホームスタジアムにて

- ・砂漠(?)のど真ん中にポツンとスタジアムが建っている。(周りは全て駐車場?)
- ・移動手段は車以外無理! だと思う。子供だけでは来れない。どうやって観客動員するのだろうか。クラブの収入に影響は無いのか?・・・時間と対応者が不在で回答を得られなかった。
- ・クラブの将来構想として、3年後には総合スポーツクラブにしてその施設をこの場所に造る計画有り。現スタジアム施設の3~4倍の敷地にトレーニング場とスタジアムを建設予定。
(精巧な模型がスタジアム内に展示されておりその壮大さは驚きを得た。)
土地と資金は充分あるものとおもわれる。



砂漠の中にあるスタジアム



バニヤスのホームスタジアム

- ・クラブの下部組織の状況や実態は見学時間が合わずわからなかった。
- ・前回訪問した時に訪れたドバイのクラブは大型～マイクロ、バンも含めクラブ所有の車両が確認しただけでも 57 台あった。子供達はクラブ専用バスで送迎がある模様。
- ・一歳刻みの各年代別の練習場としてそれぞれ天然芝グラウンドが確保され、ゴールキーパー専用グラウンドもその別に設置されていた。
- ・クラブハウス内は当然の如くロッカールーム、シャワールームが完備。ドクター常駐の部屋も完備されていた。

③UAE リーグ 8月～4月の間に開催

UAE リーグ(UAE Football League)は、アラブ首長国連邦のプロサッカーリーグである。創設は 1973 年。優勝チーム、2 位及び UAE プレジデントカップ優勝チームには AFC アジアチャンピオンズリーグ出場権が与えられる。また、3 位のチームには AFC アジアチャンピオンズリーグ予備戦出場権が与えられる。



リーグ前の挨拶



試合後のインタビュー

④国際大会での主要な戦績

AFC チャンピオンズリーグ優勝 1 回 :アル・アイン (2002-03 シーズン)

⑤参加クラブ(2010-11 シーズン)

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------------|
| 1.AL WAHDA FC(アル ワハダ) | 2.AL JAZIRA FC(アル ジャ ジーラ)－ABUDABI |
| 3.AL AIN(アル アイン) | 4.BANIYAS FC(バニヤス)－ERDE |
| 5.AL SHARJAR FC (アル シャールジャ) | 6.AL SHABABU(アル シャバブ) |
| 7.AL AHRI(アル アハリ) | 8.AL DAFRA(アル ダフラ) |
| 9.AL WASL(アル ワスリ)－DUBAI | 10.AL NASR(アル ナスル) |
| 11.DUBAI FC | 12.KALBA FC(カルバ) －KALBA |

⑥歴代優勝クラブ

1973/74 : アル・ウロバ(現シャールジャ SC)	1974/75 : アル・アハリ
1975/76 : アル・アハリ	1976/77 : アル・アイン
1977/78 : アル・ナスル	1978/79 : アル・ナスル
1979/80 : アル・アハリ	1980/81 : アル・アイン
1981/82 : アル・ワスル FC	1982/83 : アル・ワスル FC
1983/84 : アル・アイン	1984/85 : アル・ワスル FC
1985/86 : アル・ナスル	1986/87 : シャールジャ SC
1987/88 : アル・ワスル FC	1988/89 : シャールジャ SC
1989/90 : アル・シャバブ	1990/91 : リーグ中斷
1991/92 : アル・ワスル FC	1992/93 : アル・アイン
1993/94 : シャールジャ SC	1994/95 : アル・シャバブ
1995/96 : シャールジャ SC	1996/97 : アル・ワスル FC
1997/98 : アル・アイン	1998/99 : アル・ワーダ
1999/00 : アル・アイン	2000/01 : アル・ワーダ
2001/02 : アル・アイン	2002/03 : アル・アイン
2003/04 : アル・アイン	2004/05 : アル・ワーダ
2005/06 : アル・アハリ	2006/07 : アル・ワスル FC
2007/08 : アル・シャバブ	2008/09 : アル・アハリ
2009/10 : アル・ワーダ	2010/11 : アル・ジャジーラ

⑦クラブ別成績（優勝回数）

アル・アイン	9 回
アル・ワスル	7 回
シャールジャ	5 回
アル・アハリ	5 回
アル・ワーダ	4 回
アル・ナスル	3 回
アル・シャバブ	3 回
アル・ジャジーラ	1 回



第四章

U.A.E クラブ視察

アルアハリ（カンナバー口選手所属・前年度リーグ3位）のクラブハウスにて

- ・スタジアム付きのトレーニング場が完備されている。

① ゲーム視察

「アルワハダ（2010クラブW杯出場・5位）対バニヤス（1位）」のU.A.Eリーグ視察
飛行機の関係で前半途中で退席。

観客は極端に少ない。おおよそ200～300人くらい

② クラブ訪問（アルアハリ）

- ・監督はイングランドプレミアリーグでの監督経験もあるオレアリー氏が就任。
スタッフはヘッドコーチがイングランド人だが他のスタッフはU.A.E人が務めていた。
メディカルスタッフやエクイップメントスタッフは把握できていないが総勢で20名位は帯同していたようである。
- ・レベルはJFL～J2レベルと思われる。
- ・コーチが指導 GKコーチなし
- ・クラブ施設は近代的で充実している
- ・トレーニングルーム（室内ジムマシン）の奥に部屋があり、MRI（磁気共鳴映像機）等医療設備が整えてある。
- ・選手のコンディションケアのため様々な種類の風呂が完備されている。



アル・アハリクラブの正門



クラブハウス内の選手治療用風呂



MRI



選手用シャワー



トレーニングルーム



電気治療機器



マッサージルーム

◇オレアリー監督インタビュー（2011年12月16日）

Q.1 今日のトレーニングはサイドをアタックし、クロスからシュートするというパターン練習を繰り返していたが、ゲーム形式はサイドを切り取った縦長でかつコンパクトフィールド（40×50m）で行っていた理由は？

A.1 トレーニングではサイドアタック、ゲーム形式では攻守の切り替えをテーマに行った。トレーニングとゲームを別のテーマで行った。

Q.2 計画したトレーニングを変更（アレンジ）する条件は何？

A.2 トレーニング計画は2週間単位で作成する。

途中で怪我人が出た場合は、試合に向けた準備をする上で、変更が必要になる。

◇カンナヴァーロインタビュー (2011年12月16日)

Q.1 あなたはたくさんの素晴らしいチームでプレイしました。どの経験が一番印象に残りましたか？！また思い出のある監督は誰ですか？！

A.1 『どのチームでの経験も本当に自分のキャリアにとって重要だった。
監督は誰もが素晴らしい人物で、誰からも色々なことを学んだ。カペッロ、リッピ etc』

Q.2 あなたが考える CB としての理想像は？そしてとくにコンビを組んでフィーリングの良かった選手は誰ですか？！

A.1 『CB としての重要なことは【研ぎ澄まされたコンセントレーション】だ。視野を広範囲にわたって広げ、どの相手選手が瞬時にして一番危険人物になるかを考察しておかないといけない。もちろんそのためにポジション取りが一番重要となるのだが、これも注意力を働かせておかないとできない。だから必要不可欠なのが全体を見渡した集中力だ。
中央でコンビを組んでやりやすかったのはネスタ(代表)、テュラム(パルマ時代)、マテラッツィ(代表)…etc、もちろん他にもたくさんいるけど、この3人とはインスピレーションが合った経験が多い』

Q.3 あなたは数多くの偉大なアツタッカンティ(FW たち)たちと対戦してきました。屈強で、そして中には背の高い選手たちもいました。あなたが考える背が高くなくても(自身は175cm)空中プレイで自分よりも背の高い選手と同等に渡り合える武器とはいったい何でしょう？！

A.3 『一番大切なのはボールをとらえるタイミングだ。すべてはボールの落下地点へのタイミングを合わせればどんな相手でも勝負することができる。もちろんそのために【ポジションを良くする】ということと言うまでもない。ただし、これは誰から教わったというのではなく、幾多の修羅場をくぐり抜けて培ったものであり、実践経験こそ自分の能力に経験を与えてくれたと信じている。』

Q.4 どのタイプのストライカーが対戦して一番手ごわかったですか？！

A.4 『たくさんいたけど…ロナウド(元ブラジル代表-2002年 W 杯得点王)だ。怪我をしてからスピードは落ちたが、ゴール前で何をするか予測が不可能なくらい厄介なことを仕掛けてくる。非常にインテリジェンスもあって創造性があふれるプレイヤーだった。怪我をする前の彼はスピードも兼ね備えており、誰も止めることができないプレイヤーだったと断言できる』

Q.5 日本が世界と対等に渡り合っていくためにはどのような点を磨いていくことが大事だと考えますか？！

A.5 『日本はすでに素晴らしい監督をゲットしたから問題ないだろう？！笑 ※ユーモアを交えた回答。
冗談を抜きにして、本当にザッケローニ監督は非常に優秀な監督であり、経験も豊富だ。だからきっと日本代表にもその豊かな経験と知識を与えてくれるだろう。ましてや日本は前回の W 杯でも世界を驚かせたように飛躍的に進歩しているナショナルチームだ。しっかりと目標を見据えて素晴らしい監督と歩んでいけば必ず良い方向に進んでいくだろう』

Q.6 W 杯を勝ち取るためにあなたは帰化してザックと一緒に戦ってくれませんか?! ※日本も負けじとユーモアで対抗

A.6 すでに言っただろう?! 君たちは非常にキャリアに満ち溢れた素晴らしい監督と出会った。その監督が与えてくれる的確なアドバイスと、厳しい戦いを積んでいくからこそがこれから必要になってくる。だから若いプレイヤーたちがどんどん欧州などでプレイしていくことにミステル(ザックローニ監督)がスパイス付け加えていけば、より素晴らしいチームとして機能するだろう。

兵庫県指導者側

今日はとてもありがとうございました。あなたの素晴らしい経験談をしっかりと日本にも伝えていきたいと思います。

最後にカンナヴァーロ選手と握手、全体集合写真を撮影して終了した。



オレアリー監督



カンナバーロ選手

◇アルアハリ トレーニング内容

1.W-Up 15min

ショートダッシュ

コーディネーション系ステップワーク

2.トレーニング1 10min

ポゼッション (7対2) 15 × 15 m

3.トレーニング2 20min

サイドアタックからクロス → シュート

【オーガナイズ】

- ・ゴール横からセンターサークル付近の選手にロングパス
- ・中→外と展開 (4本のパスで5人が関わる) し、クロスからのシュート
- ・ロングパスを蹴った選手はペナルティエリア内の守備者になる

4.ゲーム形式 15min

【オーガナイズ】

* グリッドサイズは横はペナルティアリアの幅、縦はハーフコート

* 9対9+GKのゲーム

- ・ 監督は見ているだけでコーチングはしない
- ・ コーチがトレーニングを実施
- ・ GKコーチはいない
- ・ アシスタントコーチは2人



フィジカルトレーニング



給水中の選手（右がカンナバー口選手）

第五章

FIFA クラブワールドカップ視察・分析

FIFA WORLD CUP MEETING①（担当者：鈴木義章）

ゲーム分析1

準決勝①

インテルナシオナル(ブラジル) 対 マゼンベ(コンゴ)

2 対 0 でマゼンベが勝利

マゼンベの勝因

- 1 個のレベルの高さ
FW⑮カルイトウカ GK①キディアバ
- 2 相手よりも早い攻守の切り替え
※インテルナシオナルの不調？油断？

インテルナシオナルの敗因

- 1 コンディション
運動量が少なく、攻守の切り替えが遅い
- 2 研究不足
マゼンベの左サイドを突かなかつた
- 3 過剰な警戒心と自信喪失
FW⑮カルイトウカのスピード
GK①キディアバのファインセーブ

ゲーム分析2

準決勝②

インテルミラン(イタリア) 対 城南一和(韓国)

3 対 0 でインテルが快勝

インテルの勝因

- 1 個のレベルの高さ
全員
- 2 チーム戦術の徹底

3 明確な役割分担に対する責任の実践

城南一和の健闘と課題

- 1 怯まず、自分たちのサッカーにトライ
ブロック・ラインを組織的に形成
攻撃時には厚みのあるカウンター
- 2 開始直後の失点で崩れたゲームプラン
- 3 インテルの個人・組織とは明らかな差

ゲーム分析3

決 勝

インテルミラン（イタリア） 対 マゼンベ（コンゴ）

インテルの勝因

- 1 バランスの良い守備ブロックの形成
具体的
(A)前線から最終ラインまでがコンパクト
(B)味方同士の適切な距離
適切な距離だからチャレンジ&カバーが機能する
シュートを打たれない ボールを奪える
- 2 レベルの高いオフ・ザ・ボールの準備
(A)危険な選手の認知
ボールが入れば、限定する
インターセプト
(B)動きへの対応
離していても、動けばついていく
- 3 1対1の強さ
マイコン コルドバ ルシオ キヴ モッタ カンビアツソ サネッティ …
- 4 相手チームを十分に研究
具体的
(A)弱点の左サイドを攻めた
先制点は左DF③と左CB⑩の間でバンデフがエトーからのパスを受けてシュート
2点目は右サイドをカンビアツソとサネッティで崩し、エトーがシュート

時間帯 点差 選手交代

- (1)リードした状態でのラスト15分
- (2)点差によるブロックの高さ

(3)怪我人対応 運動量の確保 守備に重点

これらを支える要素

(A)個人の判断とチーム戦術の成熟

(B)各ポジションで忠実に役割分担

(C)主導権を握ってゲームをコントロール

(D)主導権を握ってゲームをコントロール

(A)～(C)を支える土台(基本要素)は高い個の能力(ボールを失わない 切り替えが早い)

マゼンベの健闘と課題

- 1 個人の身体能力では上回っている選手がいた FW⑮カルイトウカ GK①キディアバ
- 2 インテルのミスからチャンスを得たが、シュートを打たなかった
- 3 インテルの個人・組織とは明らかな差

研修の成果

- ・海外のサッカー事情を自分で見聞できた
- ・FCWCを現地で観戦できた
- ・参加者間での交流ができた
- ・マルコのセミナーとディスカッションで「サッカーを観る目」や「分析力」がレベルアップした
- ・次回が待ち遠しくなった



対戦相手を分析するインテル ベニテス監督

FIFA WORLD CUP MEETING② (担当者 : 吉田啓夫三・小畑明・福山友和)

Theme1:準決勝 マゼンベの攻撃

FIFAクラブワールドカップUAE2010 準決勝

マゼンベ(コンゴ共和国・CAF)VS インテルナシオナル(ブラジル・CONMEBOL)

日 時 12月14日(火)20:00キックオフ(日本時間25:00)

場 所 モハメド・ビン・ザイード スタジアム(UAE アブダビ)

天 候 は れ

気 温 22.0℃

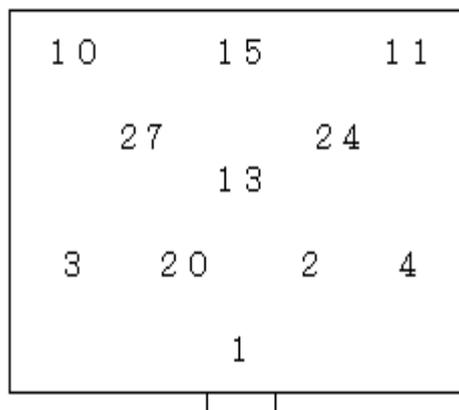
湿 度 60%

風 速 6.0m/s

分 析 マゼンベの攻撃

- ・マゼンベの攻撃は、自分たちの能力を把握していたので、徐々にゲームに入りチームとしての統率がよくとれていた。
- ・最初の20分は、FW⑮カルイトウカを中心に攻撃を仕掛け、両サイドのスペースを攻撃した。
- ・FW⑮カルイトウカが左サイドに動き、DFより縦パスが2～3本出ることにより突破できた。
- ・初めの頃は、DFはビルドアップをするのではなく、空中のパスが多かった。
- ・FW⑮カルイトウカの能力が高く、空中のパスの処理も良かった。
- ・2～3回、FW⑮カルイトウカが仕掛けたが、1回はDFに、2回はGKにクリアされた。そのことにより、サイドのFW⑩シングルマ、⑪カソゴが相手ゴール前のスペースまで侵入しなかった。まだ、自分たちのチーム力を信じられず、ラインをあげることが出来なかった。
- ・最前線と中盤の距離が空いていたが、これはいけるかもと間が徐々に詰まってきた。(ラインを上げ、押し上げた)
- ・後半は、開始直後より、コンパクトに攻撃をしようと試みた。(自分たちを信じて)
- ・攻撃の軸はFW⑮カルイトウカが中心であり、クオリティーも高く、彼を信じて⑩シングルマも押し上げることが出来た。
- ・チームとしてFW⑮カルイトウカが、試合の鍵を握っていることを理解していた。前半は、自分たちの力が

システム (4-3-3)



信用できないため、無理をしてまでラインを上げることはしなかった。後半に入り、前線からプレッシャーをかけ、ボールを高い位置で奪い取ることでより攻撃ができた。

- ・前線で、FW⑮カルイトウカが、ボールをキープすることにより、⑩シングルマと⑪カソゴが、スペースへ走り込むことだけを考えれば良いようになった。楽に前線のスペースへ飛び出せた。

総括

- ・攻撃とは、前線の3人ではなく中盤の押し上げが必要である。
- ・チームが犠牲心を払いチームに勝利を導いたが、チームとしての攻撃のオーガナイズは感じられない。
- ・チーム戦術ではなく個人の突破であるが、インテルナシオナルの力を認めて自分たちの戦い方(ボールポゼッションの上回る相手に対して守備を重視)をしたことにより勝利をもたらした。
- ・自チーム及び相手チームをよく分析してゲームに臨んだのであろう。
- ・自分たちは能力が低いと思っていたが、前半より随所に見せた好プレーにより、ますます自信をつけこの試合を通して攻撃力及びチーム力も成長したように思う。

文責 吉田啓夫三

Theme2:準決勝 マゼンベの攻撃

FIFAクラブワールドカップUAE2010 準決勝

インテル(イタリア・UEFA)VS 城南(韓国・AFC)

日時 12月15日(水)21:00キックオフ(日本時間26:00)

場所 ザイード スタジアム(UAE アブダビ)

天候 はれ

気温 22.0℃

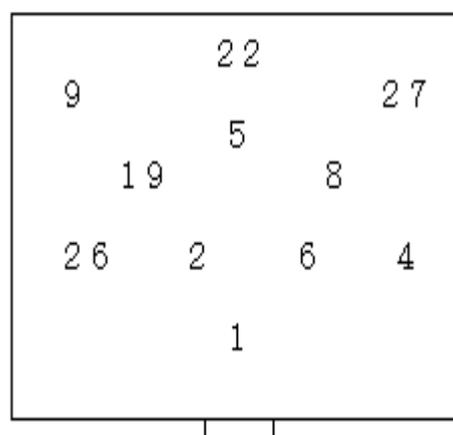
湿度 71%

風速 3.0m/s

分析 インテルの攻撃

- ・インテルの攻撃は、立ち上がりより相手ゴールに向かいボール保持をしながら攻撃を行った。
- ・パスは、ダイレクトorツータッチ以下でボール動かし、スペースを有効に使い攻撃をしている。また、両サイドへの展開力も備えている。
- ・スペースを作る動き、スペースを使う動きを全員がよく理解し確実に行っている。
- ・ゴールを奪うために、前線よりボールを奪うことを徹底している。

システム (4-3-3)



例として、前半25分過ぎに城南右サイドの中盤からDFへのバックパスをインテル左サイドに位置した19番カンビアツと22番ミリートが、チャンスとみるや一気にプレッシャーを掛け高い位置でボールを奪いシュートへと結びつけた。

・オンの動きとオフの動きが、徹底して行えるチームである。2点目が象徴していた。(図1)

左サイドDFの26番ギブから中央MF8番モッタへやや左に居たMF5番スタンコビッチから右サイドに出来たスペース(最初MF27番パンデフが居たが、ボールが動いている間にDF4番サネッティを

侵入させる為にスペースを作り出した)にオーバーラップしてきた4番サネッティへ3本のダイレクトパスでサイドチェンジを行う。

4番サネッティが相手DFを1人抜き去り数的優位に立つ。前方に出来たスペース(27番パンデフが居たが4番サネッティをドリブルで侵入させる為に、再度右タッチライン際のスペースへ動き作り出した)へドリブルで侵入。

27番パンデフの動きに相手DFが外側に引っ張られDFとDFの間が空いたスペースへ、FW22番ミリートが動きだしサネッティが縦パスを出す。

4番サネッティは、パス&ムーブで相手DFの裏のスペースへ22番ミリートからダイレクトのヒールパスがサネッティへ通りシュートへと結びついた。

FW9番エトーも逆サイドから相手DFの間に出来たスペースへ走り込んでいた。

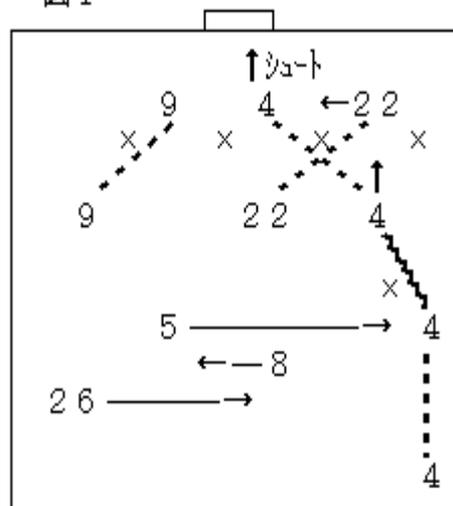
流れるようなダイレクトパスからのサイドチェンジ、スペースを作る動きとスペースを使う動きを織り交ぜながらシンプルにゴールへ向かう攻撃を見せた。

総括

・前半・後半で2つのシステムを使い分けていた。3点目は、偶然に生み出した得点であろうと思われるが、1点目MFスタンコビッチ、2点目DFサネッティ、最後はFWミリートとどのポジションの選手であってもチャンスと見ればスペースへ飛び出し、どこからでも得点できる攻撃力を持ったチームである。

・インテルは、スペースを有効利用しながら、テンポ(攻撃のスピード)も相手に合わせて自由に変えながら攻撃のできるチームである。

図1



文責 吉田啓夫三

FIFA WORLD CUP MEETING③ (担当者：鈴木義章・大塚恭平)

Theme3:準決勝 マゼンベの守備

システム

4-5-1(4-3-3)

特徴

- (1)身体能力が高い選手が組織的なサッカーをする
- (2)奪われたら素早い守備に入る
(守備を免除される選手はいない)
- (3)バランスのとれたポジションで、相手の基点を潰す為にボールを奪いにゆく。
- (4)リトリートと高い位置でのプレスの

共通理解された使い分け

課題

- (1)センターバック⑩がサイドで守備をする時のギャップ
- (2)サイドバック③が攻撃参加した時の
左サイドのカバーリング
- (3)ゲームを通しての動きの量
・チーム全体のハードワーク

決勝戦の展望

- (1)バイタルエリアでの守備
・ミドルシュート対策
・不用意なファールからのFK
- (2)サイドの守備
- (3)ゲームを通しての動きの量と質

FIFA WORLD CUP MEETING④（担当者：井上信）

日 時： 2010,12,13～12,20

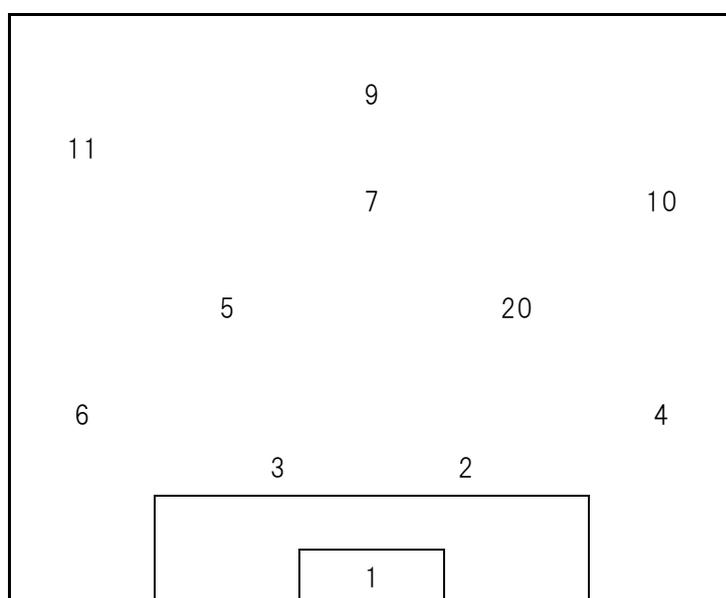
場 所： UAE(AbuDhabi)

分析対象試合： 準決勝 2 試合、決勝戦の合計 3 試合

Theme4:準決勝 インテルナシオナル VS マゼンベ インテルナシオナル攻撃

【フォーメーション】4-2-3-1

図1



特徴

- ・ ショートパス主体の攻撃で、左サイド⑥からの起点が多く、⑩を経由しての形が多く見られる
- ・ 全体的に左利きが多く、攻撃時のビジョンが左に偏りがち
- ・ ⑨がゴール前にはり、⑩の進入してくるスペースを上手く作れていた
- ・ トリッキーなセットプレー

気付いた点として上げられるのが、特徴でもある左サイドの⑥から始まる攻撃。ゴールキーパーからのスローやキックを含めて、そのほとんどが⑥へ配給されていて、またそのあとに、ボールを受けに来る選手(⑤、⑦、⑩)もまた左利きで、ファーストタッチがどうしても左サイドへ偏る傾向にあったし、その後の攻めも、左サイドからショートパスで崩していくものが多かった。しかし、同サイドに人数をかける事により、何度かサイドを突破してクロスを上げるところまで言っていたのも事実である。

それとは、対照的に右サイドからの攻撃はほぼ皆無で、出始めたのは⑩が右サイドへ移動してきた前半途中からのみ。それも、相手左サイドバックが上がって出来たスペースでボールをもらう事によってだが、⑩

もまた左利きで、中央へのゆったりとしたスピードでのボールキープを好み、効果的な速攻にはならず、せっかく開いているスペースに④が⑩を追い越してくるサイド攻撃も見られず、勿体無かった。

前線に目を向けると、⑨が何度か効果的な動き出しをしてゴール前でフリーになる場面があったが、GKとの1対1を外すなど、決定機を物にできていなかった。後半、セットプレーで何度かチャンスを演出するも、決めきれず、ここでも決定力がなかった。

改善点

- ・ ショートパスを駆使し、サイドを崩して攻めていたが、クロスへの反応、右サイドのスペース、2列目からの飛び出しなど、空いているスペースをフィニッシュに向けて利用できていなかったのもっと意識していくべき
- ・ サイドチェンジに時間がかかっていた。④の前に空いていたスペースを有効利用できず、またCB2人が近いため、DFラインを4人でまわす羽目になり、起点となる両サイドバックが低い位置でボールを受けられる場面が多いので、もう少しロングボールをいれるなど、サイドチェンジのスピードアップを心がけたい
- ・ 何とんでも、問題点だったのは、決定力。良い崩しからのフィニッシュまでの形が何度となくあったが、ことごとく外してしまった。決定機を物にしたチームが勝つので、良い準備でシュート精度を上げたい

総評(マルコ氏)

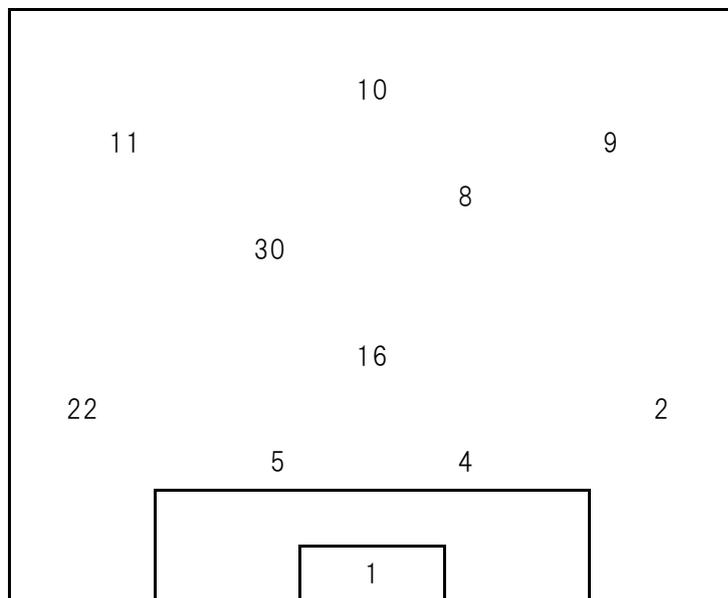
- ・ 組み立ての意識は共通理解できていたが、決定を外し過ぎた。(⑧,⑩,⑪番)
- ・ 相手が戦術的に弱かったのに、そのギャップ(右サイド)を上手く利用することが出来なかった
- ・ ⑥は勇気を持って相手エリアまで侵入し、攻撃に参加すべきだった
- ・ 試合を決めたのは、マゼンベのGKのファインセーブによる精神的効果。戦術 VS 個人能力という試合だったが、個の能力でマゼンベが勝ってしまった



Theme5:準決勝 インテル VS 城南一和 城南一和攻撃

【フォーメーション】4-3-3

図3



特徴

- ・ 個々の目立った力はないが、組織的でショートパス主体の攻撃
- ・ しっかりと DF ラインから組み立ててからのサイド攻撃

気付いた点として、インテルを相手にしても、しっかりと後ろからつないで攻撃の形を作ろうとしている意図がはっきりとしていて、自分達よりも強い相手を前にしても、自分達のサッカーで攻撃を組み立てようとしていた。しかし、バイタルエリアまではボールを運ばせてもらえるものの、その先のところで相手の網にかかってしまう場面が多かった。もちろん、インテル守備陣が後ろ4枚と中盤の2枚の6枚でしっかりと守備ブロックを形成していたのはあるが、そこを崩しきれほどのアイデアや個々の能力がなかった。例えば前半などはもう少し遠い位置からのシュートを狙い、相手 DF ラインに少しでも恐怖を与え、ラインを上げて GK と DF ラインにスペースを作るという作業をしても良かったかもしれない。2列目からの瞬発力を生かした飛び出しが少なかった。

そして、サイド攻撃だが、両サイドバックが中々勇気を持って上がることができずに、数的優位を作り出すことに失敗していた。しかし、後半時間が経つにつれ、両サイドバックが点を取りに高い位置を取って、選手をかえ、4トップ気味になり攻撃的にはなったが、今度は位置が高すぎたため自ら攻撃のスペースを埋めてしまっていた。

セットプレーに関しては、⑩や⑤の高さを生かしきれず、残念だったがこれは個々のキックの技術にもよるだろう。

改善点

- 例えば前半などはもう少し遠い位置からのシュートを狙い、相手 DF ラインに少しでも恐怖を与え、ラインを上げて GK と DF ラインにスペースを作るという作業をしても良かったかもしれない。そこへ、2 列目からの瞬発力を生かした飛び出しが出れば面白かった
- セットプレーは、もう少し機転を利かせて直接あげるよりも、俊敏性(スピード)を生かしたものが、あってもよかった
- バイタルエリアへ入ってからの、アイデアが乏しく、また準備も悪く最後の崩しで時間がかかってしまい、囲まれてとられてカウンターという悪循環になっていたのでは、ゴール前でのパターンがいくつか欲しかった
- 0-2で折り返し、インテルが引いてくれたのに対し、ロングフィードでの攻めが後半目だったが、しっかりと前半同様足もとでつないでから崩せたのでは
- 交代で入ってきた選手が、試合に入れなかったが、これはもっと準備するべきだ
- 唯一の得点機かもしれないが、FK のこぼれ玉を⑩は外してはいけなかった。準備不足

総評(マルコ氏)

韓国チームは欧州チャンピオン相手に臆することなく、しっかりとパス中心にゲームを組み立てることを選択したが、王者インテルは 6 枚の守備ブロックが完璧と言える守備を形成していて、それを乗り越えることは難しかった。

そんな中でも、唯一得点のチャンスがあったのはセットプレーだが、そこでのアイデアが乏しかった。

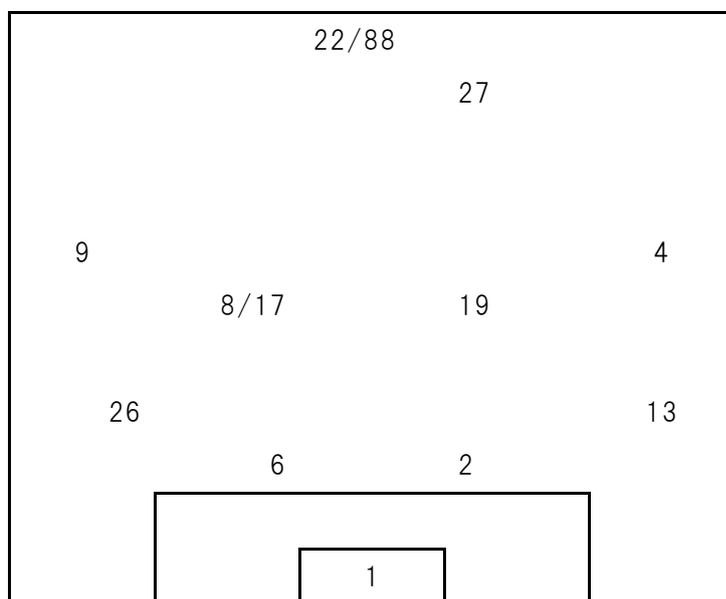
両サイドの選手が、もっと効果的に勇気を持って上がれば、サイド攻撃が深くまで仕掛けられて、もう少し違った形になったかも。



Theme6:決勝戦 マゼンベ VS インテルミラノ インテルミラノ攻撃

【フォーメーション】4-4-2

図 4



特徴

- ・ GK を含む 6 枚の守備ブロックでボールを奪ってから、素早い攻撃が持ち味
- ・ 両サイドのエトーとサネッティが起点となり、ミリートやパンデフの動き出しから開いたスペースへ 2 列目からの飛び出しという攻撃パターンが出来ていた
- ・ 11 人の仕事が非常にはっきりと明確であった

試合前から、対戦相手がアフリカ王者のマゼンベということで、個の能力だけで、強豪相手に通用するかどうか焦点になっていたが、やはりサッカーはチームスポーツであることが改めて強調されたのではないか。それを象徴したのが、インテルの攻撃の起点にもなっていた DF4 枚とボランチ 2 枚、さらには両サイドの 2 枚を含んだ 8 枚での組織立ったインテルの守備ブロック。そこで、ボールを奪い、一度サイドへ展開して、開いた中央のスペースに選手が入ってくるという攻撃がオーガナイズされていたところではないだろうか。相手 FW⑩も 1 人で守備ブロックを突破することは出来ず、逆に取られてカウンターのかっかけになっている場面もあった。

インテルは、サネッティやエトーにいったんボールを預け、その時間にミリートやパンデフなどが DF ラインの裏スペースへ抜け出し、相手陣地の深いところでボールを受けることが出来ていた。そして、それにより、また空いた中央のスペースに 2 列目からの選手が飛び出してきて、それに対応できずにいた相手守備ラインを突破し、ゴールへ結び付けていた

改善点

- ・ 11 人がしっかりと相手守備陣を分析した結果の攻撃だった

- ・ 数回エトーが孤立する場面が見られたが、それはエトーがドリブルするためのスペースを空けるという意図があったので特に問題はないが、攻撃パターンを増やすという意味では、もう少しオプションがあってもいいかも
- ・ スペースを作り、そこを使う。そしてまたスペースを作るというサイクルが完成されていたので、改善の余地はなし

総評(マルコ氏)

マゼンベの個の力がどこまで通用するか楽しみな一戦だったが、大方の予想通りインテルが勝利した。サッカーにおける攻撃の基本であるスペースを使うということが、よく出来ていた。インテルの選手は、状況を読む力に長けていた。そして、カンビアツソ、モッタを中心に完璧な守備ブロックを作り、そこで奪い攻撃へと移れていた。狙い通りのサッカーが出来ていたのではないかと。得点も、そこらからの得点でいかにスペースを上手く利用することが大事であるか再認識できた。選手交代した選手も結果を出し、全てにおいてインテルがマゼンベを上回っていたと言える。

FIFA WORLD CUP MEETING⑤ (担当者： 岡俊彦)

Theme7:準決勝 インテルナショナルの守備

日 時 2010年 12月 14日(火)
場 所 モファメドビンザイドスタジアム
キックオフ 20:00
対 戦 SCインテルナショナル 0-2 マゼンベ

◇システム 4-2-3-1

◇試合開始時のフォーメーション

```

          ⑨
        アレクサンドロ
    ⑪ソビス      ⑦チンガ      ⑩ダレッサンドロ
          ⑤          ⑳
        ギニヤス      マチーアス
    ⑥      ③      ②      ④
  クレーベル  インジオ  ポリーヴァル  ネイ
          ①
        レナン
  
```

身体能力の高い選手が組織的な守備をおこなっていた。トップの選手もボールを奪われたあとすぐに守備にはいつていた。現在のサッカーでは、守備を免除される選手は誰もいない。バランスの取れたポジションで相手の基点を崩す為にボールを奪いに行くしっかり引きブロックしリトリートと高い位置でのプレスへの共通中盤の⑤ ⑦ ⑩3名がトライアングルを作り左右にスライドし守備を行っていた。特に⑦の運動量が多くボールをよく奪っていた。

守備ラインの中心プレーヤーは、②ポリベール 中央の二人の選手は、あまり足が速くない。失点した後は、攻守の切替えが遅くなっていた。失点時は、ボール際につめが悪く簡単にシュートを打たせてしまい失点してしまった。53分の失点 ロングフィードからの折返しをコントロールされ⑪カバングにシュートを打たれた。⑤③②のポジションが悪く簡単にシュートを打たせてしまった。85分の失点 相手GKからのパスを⑮カルイトウカが中央にドリブル ⑤ギニャスが対応。相手選手に背中をみせる反転をしてしまいシュートブロックが遅れてシュートを打たれた。

課題

- (1)⑪ ⑨ ⑩の前線の守備 FWの選手は、ボールを奪うために守備しないといけないがプレッシングシ
ングが効いてなかった。
- (2)1対1の対応の悪さを改善する。

Theme8:準決勝 城南一和の守備

日 時 2010年 12月 15日(水)
場 所 ザイードスポーツシティスタジアム
キックオフ 20:00
対 戦 インテル・ミラン 3-0 城南一和

◇システム 4-1-4-1 マルコ=4-2-3-1

◇試合開始時のフォーメーション

		⑩ ラドンチッチ		
	⑪ モリーナ		⑨ チョ	
		⑧ チョン	③⑩ チョ	
			⑬ キム	
⑫	④	⑤	②	
ファン	オグネノフスキ	チョ	コ	
		①レナン		

フォアチェックにより自陣でブロック内に入ってくるボールを奪ってカウンターを狙うゲームプランを考えていたようだが早い時間帯の失点によってプランが早々と崩れたと予想される。1対1の対応の不味さ オフ時の準備が悪さ(守備の個人戦術が徹底できていない＝ボールにばかり気を取られタイミングよくボールを奪うことが出来ないことが多かった。)

サイドバックへのプレッシャーが弱くドリブルされた後のカバーが出来ていなかったりルーズボールへの競り合いでも対応が遅くファウルを取られることが多く、ボールを奪うことが少なかった。

課題

(1)1対1の対応(オン・オフ)→競り合いに負けない→失点の要因

打たれたシュートは、少なかったが、シュートを打たれた時の対応が悪かった。

(2)2列目から前線に上がってきた選手への対応

ボールウオッチャーにならない為にボールとマーカを常に同一視野に入れておくことと体の向きに注意し走りこんできた選手に対応が出来るようにしておくことが必要であった。

(3)アンカーとの連携

狭い地域でのチャレンジ&カバーの徹底。

(4)GKとのDFラインの連携

GKからのコーチング

FIFA WORLD CUP MEETING⑥ (担当者 : 塩見元)

Theme9:準決勝 インテルミラノの攻撃

決勝 インテル(ヨーロッパ王者)VSマゼンベ(アフリカ王者)

インテルの攻撃基本戦術はカウンターにある。しかも両サイドからも中央からも攻撃できる多彩なバリエーションを持っている。その根底にあるのはディフェンスの強さからであり、相手を誘い込んでボールを奪う、そこからの攻撃の素早さ、しかもその戦術がインテルの選手全員が共通理解している。ボールを奪った瞬間に2番目、3番目、4番目の選手の動き出しがとても早い。

本大会の決勝戦のスタートシステムは4-4-2(フラット)。左サイドのMFに⑨エトを置き「ベンゼマ」の注意をそこにおかせた。最初の得点はまさにその意図通りの展開で左サイドの⑨エトからのアシストによって得点をした。2点目は右サイドからの崩しに中央で⑨エトのゴール。2点リードした後半は4-5-1(マルコは4-3-3と言った)に変え、1トップに⑨エトを配し逃げ切りに入った。しかも隙あればカウンターを狙う非常にうまい戦術を取った。3点目はそうした戦術による2列目からの飛び出しによるものであった。

インテルの強さは個々の技術の高さもさることながら、各選手のオフザボール時の判断の速さと正確さ、それに伴う動き出しの速さにあると感じた。

優秀な選手を育成するには少年期からさまざまな経験をどれだけ積み重ねられるか、そこにカギはある。



○ 前半 2

○ 後半 1

○ 合計 3

得点者 【13分】 27 パンデフ
 【17分】 9 エトー
 【85分】 88 ビアビアニー

	No	選手名	交代	No	選手名	交代	
GK	1	キディアバ		GK	1	ジュリオ・セザル	
DF	2	キムアキ		DF	2	コルドバ	
	3	カススラ			6	ルシオ	
	4	ヌクルクタ			13	マイコン	
	13	ベディ			26	キブ	5 スタンコビッチ
MF	20	ミハヨ		MF	4	サネッティ	
	24	エカンガ			8	モッタ	17 マリガ
	10	シングルマ			19	カンビアツソ	
	27	カソング	6 カンダ	9	エトー		
FW	11	カバング		FW	22	ミリート	88 ビアビアニー
	15	カルイトウカ	8 ヌドンガ		27	パンデフ	



あとがき

研修を終えて

2010海外指導者研修会 in UAEに参加させていただき無事終了することが出来ました。

申すまでもなく、この行事は、兵庫県サッカー協会をはじめ、兵庫県体育協会の方々の深いご理解とご協力により実現できたものです。

お陰を持ちまして、有意義なそして楽しい8日間の研修であったことをご報告し、参加者一同衷心より厚くお礼申し上げます。

12名の参加者それぞれが研修の成果を最大のお土産品として持ち帰って参りました。内容としましては、FIFA CLUB WORLD CUP の準決勝戦2試合、3位決定戦、決勝戦の4試合を視察し、各チームの攻撃の分析・守備の分析と4グループ編成で分析を行いました。試合の翌日には FIFA WORLD CUP MEETING ROOM に於きまして、各グループごとの分析を発表し、マルコ・フランチェスコさん(イタリア協会コーチ)とのディスカッションを行いました。

また、UAEサッカー協会訪問(施設見学、副会長を囲んでの昼食会)、ドバイのプロサッカークラブ訪問(練習及び施設見学、監督・現在在籍中のカンナバーロとの対談)、UAEプロサッカーリーグ観戦、アブダビ・ドバイ観光などUAEサッカー協会とイタリアサッカー協会の協力を得て、ほんの一つまみではありますが世界のサッカーとUAEの歴史や文化に接することができ、私たちに与りましても、その一つ一つが強烈な印象として残りました。

特に、サッカーにつきましては、練習段階からゲームに至るまでのすべての過程において「ゴールを目指すということが、ボールを動かし、ゴールを生む」という唯一の目標に向かって、徹底してエネルギーが集約されている実態を目の当たりに感じたようで大いに啓発されました。

マルコさんには、試合の分析から監督としての心構えまで講義していただきました。「あなた方も、子供から大人まで彼らが持っている良いものを一番に引き出してあげるよう、サッカーに携わってください。子供たちがプロのサッカー選手にならずとも真の成長を遂げるでしょう。”サッカーは、芸術である”」とのコメントを最後にいただきました。

昌子技術委員長が、「われわれ指導者が自ら指導するチームを改善する必要がある(トレーニング方法を使い)、また相手チームを分析する必要がある。今回、分析する試合またはチームと、われわれが指導しているチームや子供たちとは、距離はあるがこのトップレベルのチームを分析することで、攻撃と守備の分析の仕方を学び、今後より良いトレーニング方法を構築することができるように」との願いがこの計画の背景にあると述べられました。

1989年8月に、はじめて高体連サッカー部指導者海外研修が行われました。

約2週間にわたり、20名が参加し、英国で最も広い体育大学で多くのオリンピック選手が育ったという WEST LONDON INSTITUTE OF HIGHER EDUCATION で寮生活を送り、内容としましては、トムさん(英国サッカー協会コーチ)の実技研修及び講義、ウインブルドン VS アーセナル観戦、ウエンブリースタジアム見学や体育施設見学、ロンドン市内観光など英国の歴史に触れることができました。

トムさんのトレーニングコースでは、終始イングランドサッカーを論理的にしかも実践的に短期間で伝えようと、コーチの迫力が感じられ、気の抜けない緊張感が漂っていました。(指導者養成コース・25時間の修了証を取得)

イングランドでサッカーの育った土壌を見るにつけ、環境の違いや歴史の違いを痛感いたしました。

「クラマーさんから20数年、いまだ師を越える指導者が出ない現状においては、こんな小さな計画も無駄ではなかった。われわれの範囲でこのチャンスを生かさなければならない」と団長のお言葉を参加者全員感じたように思います。

その当時に、英国サッカー研修会を計画してくださった先生方の情熱、約四半世紀たった今回の研修会に於きましても、お世話をいただいた先生方がおられたからこそわれわれ指導者が大きなものを学ばせていただける場があったのではないのでしょうか。

わたくしは幸いにも2度の研修会に参加させていただき、研修会の形や内容に違いがありましても、得られるものの大きさは測りしれません。

どちらの研修会におきましても、プレーヤーは、ボールをこねまわし、指導者は指導理論をいじり回すことによつてのみ、サッカーを何とかしようとしている我々とは、大きな違いがあるように思いました。

海外でしか得ることができないものや感じるできないものがたくさんあるように思います。

ぜひとも、海外研修の良さを肌で感じとって頂きたいものです。

最後になりましたが、この研修会の企画・立案から現地での渉外などすべてをお世話いただいた昌子技術委員長、お忙しい中イタリア語の通訳も兼ねていただきました河村女子技術委員長には、本当にご苦勞さまでした。厚くお礼申し上げます。

共に、行動してくださいました指導者のみなさん本当にありがとうございました。

詳しいことは、またの機会とし、研修会全般のまとめとしてご報告申し上げ感謝の意を表します。

兵庫県サッカー協会

高体連常任理事

本研修会リーダー 吉田啓夫三

<参考文献>

- | | |
|---|----------|
| 最新サッカー大百科事典 | 大修館書店 |
| JFA 強化指針 | 日本サッカー協会 |
| 姫路体育研究 Vol.1 No1
グローバルゼーションの中でのスポーツ・サッカー | 昌子力 著 |
| 姫路体育研究 Vol.4 No1
神戸市少年サッカー指導者講習会の歴史に観るプログラム価値と存在価値 | 昌子力 著 |

<参考・引用>

Wikipedia

トヨタカップ

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%A8%E3%82%BF%E3%82%AB%E3%83%83%E3%83%97>)

アラブ首長国連邦

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A9%E3%83%96%E9%A6%96%E9%95%B7%E5%9B%BD%E9%80%A3%E9%82%A6>)